

文樂座人形淨瑠璃



四月本格興行

一部金二十錢

文樂座

四ツ橋

乍憚口上

百花繚亂皇國の躍進まことに目醒しき折柄四方皆々様にも御健勝に涉らせられ大慶至極に奉存上候。此時に當り本邦固有の藝術を誇る文樂座は、幸ひにも御同好諸士の御愛顧愈々熾んにして開演毎に満員の盛況に有之一座連中深く感銘罷奉候。惜而茲に本格四月興行開演に際しては更に狂言の選擇に注意を加え、花々しきうちに又當座特有の莊重味を失はず銚後健全なる娛樂としての使命を全ふすべく、太夫三味線人形連中共々一役の緊張を以て御目見得仕り精々相勵み可申候まゝ何卒相變らず御引立御聲援の程を偏に御願申上候。尙又地方御來遊の御客様方も此機を逸せず、大阪郷土藝術の眞價を御鑑賞賜はり度併せて御願申上候

昭和十四年四月二日

四ツ橋 文樂座 敬白

昭和十四年四月二日初日

毎日午後三時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金二圓八十錢

(二階座席四十錢上り)

二等席 御一名 金一圓二十錢

三等席 御一名 金五十一錢

(外に各等入場税一割)

一等御座席(一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南⑤四七一一番
專用電話

一般御用の電話 南⑤三〇三二番
三七八八番

お草履の準備は御座います、靴、草履はそのまま御入場出來ますから御便利で御座ります。

長期建設



大阪府

國 民 精 神 總 動 員

盡 志 報 國

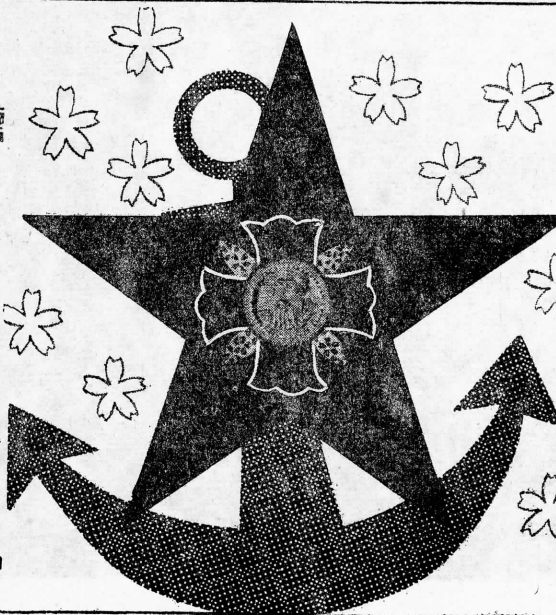
舉 國 一 致

堅 忍 持 久



國 家 護 衛 為 傷 兵 護 衛

傷 兵 保 護 院
國 民 精 神 總 動 員 中 央 聯 盟



文樂座

人形淨瑠璃

四月本格興行

第一 花競四季壽

三時より
三時四十分まで
幕間十分

第二 小春治兵衛 天網島時雨炬燵

三時五十分より
四時十五分まで
幕間十五分

第三 妹脊山婦女庭訓

五時十分より
七時十五分まで
(幕間十五分二回)

第四 三勝半七 艶容女舞衣

八時十分より
九時四十分まで
(幕間十分)

第五 盲杖櫻雪社

九時五十分より
十時十分まで
(打出し)



女子娘
作



花競四季壽

豊竹 豊竹 豊竹 豊竹 豊竹 豊竹 豊竹 豊竹 豊竹 豊竹
 澤本 澤本 澤本 澤本 澤本 澤本 澤本 澤本 澤本 澤本
 龍新 團八 喜代 吉 竹 竹 竹 竹 竹 竹
 太伊 三 造 助 左 本 本 本 本 本 本
 叶市 郎 三 造 助 左 本 本 本 本 本 本

花競四季壽

景事として夙く文化六年二月の御
 靈社内の芝居に上演せられてゐます
 春は萬歳、夏は蟹の汐汲、秋は關寺
 小町、冬は鶯娘の四段返して優雅な
 所作模様として初春にふさはしいも
 のであります。

これは百四十年前に三代目鶴澤友次
 郎（通稱松屋清七）師の作曲で其後
 三代目野澤吉兵衛師が改訂をし五代
 目友次郎師の時に至り毎年正月二日
 一門相集り式三と共に弾くのが吉例
 となり現六代目まで約六十年間の慣
 例をひいたもので今日鶴澤宗家十種
 の内にあげられてゐます。

(床本) 花競四季壽

まづ初春のあしたには、門に松立、
 壽を祝ふ厨斗目や、のし昆布、千
 代と譲り葉あざやかに告げて行らん
 鶯の聲も長閑き春のそら、實に九
 重の、賑々と、いつまでつきぬ竹本
 の其一節の世を込て幾萬歳と祝ひけ
 る。徳若に御萬歳と御代もさかへま
 します、愛敬ありけるあら玉の年立
 かへるあしたより水も若やぎ木の目
 も咲き榮へけるは誠に目出度候け
 る。やしよめく、京の町のやしよめ
 賣つたるものは何と、大鯛小鯛鯛の
 大魚ヲ鮑さとい蛤子く、蛤々蛤
 見さいなと賣たる者はやしよめ、そ
 こを打過側の棚見たれば金欄殺子、

人形

男 萬 歳 吉 田 玉 幸
 女 萬 歳 吉 田 榮 三 郎
 海 士 桐 竹 紋 十 郎
 海 女 桐 竹 政 龜
 關 寺 小 町 吉 田 小 兵 吉
 鶯 娘 桐 竹 紋 十 郎

緋紗や緋縮緬、縹子縹縹子島縹子、し
 ゆちん色々、結構に鋳り立て候ひし
 が町々の小娘やお年の寄り姥達まで
 賣かふ有様は、實にも納る御代なれ
 時なれ、惠方の御藏にずつしりく
 ずつしくくく、寶も納る門には門
 松、瀬戸には瀬戸松、そつちもこつ
 ちも幾年の御祝ひと御代ぞ目出度、
 誰にか見せん澤邊なる、花紫の色
 深く苔みを筆と杜若卵の花月に移り
 うつらふ枝くくの、花ぞちりく塵
 塚に積りも氣色面白や、月雪花を手
 にふれて、いざ慰まん調かな、元來
 鼓は浪の音、千里も響くさつささ
 浪、女浪男浪が打寄くせいがい、
 立浪高浪、四海波どうく磯打
 つ浪にゆられもまれて、さらりく
 さうくく松の嵐か、月の出汐に

雲が追出て出てくるく、出てくる
 くくくるくくく打や調の拍子に連
 て面白や、汐馴衣身にそへて、唐へ
 も運ぶ磯の浪、汐の満干にかかるまで
 もなし、沖に漂ふ磯千鳥、思ひし事
 はあだし野の露と消んと思ひしに、
 ふしぎの縁に逢初し、梓はそふした
 物かいな、それでも餘り津んくな
 エ、く憎てらしい顔はいな、夕べ
 も今宵もいざらんす、口舌しかけて
 いならでな、アレ又わしを泣そでな
 どふでもかでも逝しやせぬ、今は
 二人が吸付たばこ、きせるの煙り立
 登る、私が思ひは富士浅間登り詰て
 は、上もなき、ア汐の干潟にな、獨
 り鮑びの片思ひ、浪のよるくもナ
 浮名を流す、サイナくその心は
 あさり貝、片思ひ、浪のよるくも

ナ、浮名を流すサイナ〜その心
 はあさり貝、誰かは我を止むらん、
 此關寺の草の戸を明くれば戀しやと
 思ひし事も又昔となる、百年の姥が
 身の恥かしやとて、市目笠おほふ日
 影や吳竹の杖にすがりて、よろ〜
 くと立出見れば逢坂の關の清水に
 影うつる、老の姿のア、ア、ア、
 恥かしや、彼深草の少將の雨の降夜
 もふらぬ夜も嵐の吹夜も吹かぬ夜も
 思ひにきへし其報ひア、我實古へは
 花の姿といはれしも、いつの間にか
 は衰へて、生者必衰の理りは只目の
 前と恐ろしや、因果は廻り車のしど
 に百夜通へど空言を誠とおもひつも
 りしはさい生の山高く、生死の海深
 き其怨念の添やらん、ケ様にものに
 狂ふぞやう、つらふものは、世の中

の人の心の花や見る、餘所の見る目
 は戀すりやゆかしいとしかはゆさが
 それが、眞實ならば、そのナなん
 情けのそれが誠か、てんと誓文
 二世三世、嬉しへ、ほんに〜へ、
 浮が中にさ樂しみ心付て身繕ひいざ
 やとたつて、關寺の柴の庵りに歸り
 けり〜、忍ぶ山、口舌の種の戀風
 が吹共傘に雪持て積る思ひは猶も幾
 重か重る思ひちらす、外山の雪をく
 ゆらす、炭釜に冬籠りせし一枝を春
 待顔に初花の咲かけんとやちら〜
 と梢に宿る白鷺が霜毛を脱て羽たゝ
 きの、雪は花より花多き六つの花び
 らちらり〜杖かざしてしほらしや
 白雪の〜はらへど〜降りつもる
 花と見紛ふ雪や氷を見ながらも袖を
 かざして立寄ればそれは木々の花切



くべて樂まん、酒にいさや遊ぶらん
 四季目前に有難や、雨土恵みの青人
 草の〜盡せぬ眺めぞ樂しけれ。



天網島時雨炬燵

紙屋内の段

天網島時雨炬燵

後	豊鶴竹	前	豊鶴竹
澤澤本	澤澤本	澤澤本	澤澤本
寛呂道	寛呂道	寛呂道	寛呂道
治太相	治太相	治太相	治太相
郎夫八	郎夫八	郎夫八	郎夫八

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門が一代の傑作と謳はるゝ名作で享保五年十月十五日の明け方大阪網島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすぐさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので以来心中物の白眉とされてゐます、天満の紙屋治兵衛は妻子ある身ながら曾根崎の紀の國屋小春と深く契ります、兄粉屋孫右衛門は是を憂へて侍妾に身を扮し河庄に到り小春に遭ひ二人の仲を割かさうとし折から一ト目でも小春に會ひに来た治兵衛にも意見を加へます、小春は女房のおさんの依頼の

状によつて義理に執まれ心にない愛想づかしをいひます。治兵衛の戀敵太兵衛が小春を身請けするとの噂を聞いておさんは衣類を質入してまで所要の金を融通し、治兵衛に顔を立てさせんとします、舅五左衛門はこの体を見ておさんを連れ歸ります。治兵衛は小春と網島大長寺へ行き情死を遂げるといふ義理と愛に涙を絞る世話物の粹であります。

(床本) 紙屋内の段

福徳に天満神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神の御前町いとなむ業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付けて千早振程買に来る、神は正直商賣は、所がらなりしにせなり日脚も傾くまがり辻、横町から身すがら太兵衛、

人形

紙屋	治兵衛	吉田	榮三
女房	おさん	吉田	文五郎
丁稚	三五郎	桐竹	紋司
舅	五左衛門	吉田	玉藏
娘	お末	吉田	文枝
倅	勘太郎	桐竹	門次
紀の國屋	小春	桐竹	紋十郎
江戸屋	太兵衛	吉田	玉徳
五貫屋	善六	吉田	多三郎

ア、治兵衛殿内にか、イヤ内にそふな、サア金受取らふ、こんな贖金は入らぬ、正眞の金返して貰はふサ、今戻せ〜と上り口に大あくら、ヤコレ、太兵衛そりや何云ふのじや、全體宛名の違ふた金、覚えなければ其場の張合、お侍の世話で二十兩は濟したじやないか、が其時貴様改めたじやないか、サイノ、二十兩に違ひはないがマよふ似た正眞には見ゆれど、一兩も遣はれぬ、コ、是を見や、ヤモとんとの胴脉けさ問屋の仕切にやつたら、贖金の尻が破て、此太兵衛迄が疑はれるわい、治兵衛悪いぞや〜エ紀伊國屋の小春と、くさりついた二人が仲、揚代にせがまれ、ソレ貴様ぎりは〜して居たおれが性としてイヤモ氣の毒でならぬじやによつて、取替てやつた貳拾兩、ハ、アこりや何か待めと云ひ合せ、此太兵衛をやつたのぢやか、イヤサやつたのじやなア〜マめんよふ合點の行ぬぎぶじやと思ふたどいつもこいつも悪いやつらじやなサア其侍に逢ふ、治兵衛かたりめを爰へ出せと、そこらあたりへ當り眼、コレ太兵衛殿お侍には及ばぬ、一體この貳拾兩は清水の浮無瀬で石町の隠居坊主に思ひも寄らず借つた金、名宛を白紙でやつたが誤り、が太兵衛といふ名宛ではサア借らぬ物がなせ返した、イ、ヤイノ、コレ、贖金で返せといふ、相對はせんぞよこんな恐ろしい言事せずと、五器提ておれが門へ立てやい、へ、ン江戸屋の太兵衛は大金持ちやわい、臺所

の餘り物犬の五器の分でも四五人は
樂に喰へるわい、エ、こんな事すな
やいと、足で蹴返す鷹金の、包も切
れる腹立涙、ム、そうぢや石町の
借座敷隠居坊主といふたも曲者、引
ずつて来て面張れとかけ出すを、女
房引留めア、コレ、治兵衛様モ是程
に手を替て仕込みに仕込んだ悪だく
み、石町の借座敷に、今迄何のうか
／＼居やう、コレ氣をしづめて下さ
んせといはれて、詮方なく計り、途
方にくれたる折からに、くれぬ門で
もこちつけるちよんがれ坊主の錫杖
ふり立エ、歸妙頂禮どうか如來さん
ま、ヤレ／＼皆様聞いてもくんな、
あまりかつへて向ひ婆様ちよつとゐ
たれば後生願ひでお前の内からくわ
つ／＼と後光がコリヤ、又あんたる

うるさい事じやに。パイ／＼／＼、
／＼／＼エ、時も時とあた聞ともな
い、返りや／＼ヤレ／＼／＼けんど
な、かみさん、けん／＼いはすと、
おらが顔見て御亭主／＼我等が顔を
ばちよつと御覽じ／＼、ちよつら
ちよつと、御覽じ、何ぞ思案の種に
もなるかい、パイ／＼／＼／＼ヤア
わりや此間の坊主め、よううせたな
アと走り寄り、胸倉とつて引居れば
マ、コレ／＼親方／＼コリヤどうす
るのじや／＼私は長町の乞食坊主、
夫を内へ引ずりこんでエ、／＼聞へ
た、コリヤ何か／＼内で諷はして聞く
氣かへ、ム、諷ひませふ／＼へ、ン
／＼／＼／＼是は此頃大評判色里も
つばらちよんがれ節、新物のコレ始
り／＼ヤレ／＼／＼エ、歸命頂禮お

かたさんやんれ、ヤレ／＼／＼皆様
聞いてもくんさい、花の難波の新地
の小春に貧乏紙屋の治兵衛がなづん
で悪性通ひが杉原紙で節季は斷り仕
切はのべ、紙得意は塵紙若い美濃紙
内にや小半紙一そくならず二東三文
にまけてしまつたハ、／＼着類きそ
げも茄子の淺漬ぬかみそ臭い、内の
お嬢にやあいそもこつそり、盆も正
月も小春が方へ忍び紙とはコリヤ又
なんたるうるさいこつた、笑止なこ
つだにちよんがれもんがれ／＼／＼
ファイ／＼／＼ファイ／＼／＼やれ／＼
／＼おやま狂ひに男はぬれ紙小春は
青土佐、内儀はけつこな阿房のかゝ
紙、是が今橋うはさの書置、唯へま
したるちよんがれ坊主も元は随分お
となしもんだが浮世捨たるずんべら

ぼうのぼんぼうぼく坊主も軻れて
 が、折ました、パイ、フウアル
 〳〳〳ヤイ〳〳そりや客と偽
 り、小春を浮無瀬へ連れて来て、石町
 の坊主客になり、我難儀を見て貳拾
 兩といふ金をかし、宛名に及ばぬと
 白紙の一札モ頼もしそふに取つて置
 き思ひもよらぬ名宛は太兵衛、よふ
 も〳〳たくなんだな、有り様にサア
 ぬかせ、と取付くをふり放しエ、コ
 〳〳、親方〳〳下地の破れに又破る
 はいのム、衣が、何と云はんす、此
 わしに、二十兩の金借つた、ム、
 、ヤこいつは受目じやわい、ハ、
 、サアそんなら返して貰はふ〳〳
 〳マ、何ぢやいけつたいの悪い、
 宿なしのちよんがれ坊主をつかまえ
 て、覺えない貸主呼ばり、エ、返

したか返せ、貸た覺はごんせんぞと
 鼻も動かぬ白化しらにせ、亂れねだ
 れの腕まくり、はぜる衣のどぶ色も
 破れかぶれと見えにける、太兵衛氣
 味よく尻打叩き、コリヤ治兵衛、せ
 りふが濟んだら金返せ、但し代官所
 へ行たいかア、爰な泥棒めと、立蹴
 にどうと蹴られても證據なければ無
 念をこらへ、拳貫く齒ぎしみ齒ぎり
 スリヤどうあつても此治兵衛をム、
 代官所へ引ずつて行くサア〳〳〳
 うせいと取にかゝる二人を突のけ走
 りかゝつて戸棚の脇差抜んとす、駆
 け寄りおさん抱き留めム、道理ぢや
 〳〳がマア待て下さんせ、お前が短
 氣な事をして、跡に残つた二人の子
 供、私は何となろぞいの、ア、イヤ
 〳〳放せ〳〳と逆立半亂、治兵

衛待早まるなと奥より出る孫右衛門
 脇ざしをもぎ取て、最前から何も彼
 も皆聞いた、此場太兵衛どんとや
 らと、アノ坊主めと打放しや二十兩
 の白紙の譯が立かよ、ソレ其様に腹
 立させ、疵付させて事にする仕打は
 これまで何ぼうも有事ぢやわい、夫
 でもあんまり、サアよいと事おれに
 任しや〳〳ハテマア下にゐやいの、
 ソレおさんこの脇差を戸棚へと、落
 付く詞に落付くおさん、天の岩戸の
 戸棚へ錠まどう濟む事ぞと常男の胸
 はもた付く其所へ小春が親方紀伊國
 屋才兵衛内を覗いてへエ、御免やす
 一寸お尋ね申します、内方に江戸屋
 太兵衛様、江戸太様はお出なすてや
 ござりませんか、モいたつてほんホ
 コ〳〳といふお人ム、太兵衛様爰に

かいな、モ一遍と尋た、お前はマアぬつべりとした顔付、コレよふ駈落をさしたの、サア此二十兩返しますが埋だ小春を出して貰ふ、ヤイ、才兵衛、わりやマアねとぼけては居ぬかよ、ソリヤ一體何の事ぢやい、エ何の事、とはテモマあつかましい、代物じや、きつとした證據がござんすハイ書置があるわいの書置がサア、是讀んで見やんせと太兵衛が側へ突付れば何といふ、スリヤは見りや知れるかい、小春が書置とぬかしや、マどこぞの胸にこたへふと、したり顔に押開き、エ、何々恥しながら書殘し候は迄厚ふお世話になり候身に候へ共いとしお人の類たち申さず、是非なく駈落致しまゐらせ候エ、いま、しいげ

んさいめじやなア、今迄紙治様と深ふお云ひかはし深ふ、へ、深ふお云ひかはし遊ばしたのヒ、エ何じや今迄紙治さんと深ふ云ひかはせしはマ、待よ、せしは、じやちつとけつたいなせエ、深ふいひかはせしは皆嘘にて候ヤア、アハ、誠はほんまに太兵衛様が可愛いにて候ム、傳海、貴様アノ太兵衛様といふ客知つて居るかい、待なはれや、何でもまう聞いた様な名じやがエ、こふつと太兵衛様、ナア太兵衛様ム、イア返事して居るお前ぢやがな、ム、ほんに私に私か、えらいおかしいなアホ、、、しかしマアそんなら其氣で楽しんで讀にやならぬ、エ、どこやらじやツト愛ぢやエ、是迄

難面あたりしは、眞實の有、太兵衛様に針を持たして何じやいな、此太兵衛に針持してどうするのじや、わしや縫物はしらんがなヲ、イ、太兵衛様ソリヤ取り様が違ふてでソリヤ張を持たしといふ事ぢやエ成程そふかヤ是は下掛が讀違ひ大きには、かりさん、エ、眞實の有太兵衛さんに、張を持し請出されてほんくの女夫エ、ホ、傳海聞いてくれほんの女夫ぢやといやい、エ、ソリヤ誰といな、私とじやがなアノおまはんとかへ、そふじやがなヲ、癖しいヲ、可愛、エ、シモタ大事の狀しわだらけにして仕舞ふたドウ、皺を延してやりませふ、ハア、シイ、何ぢやほんの女夫になり末

永ふ添通したき願にてわざと難面致し、
 〇ヤア〇〇〇〇りや風が變つて来たと、俄に肩入裾のばし色事しの氣になり、太兵衛がぞく〇傳海はほくそづく、イヤコレ親方どうやら甘臭い文句じやなア誰が聞いた、サ、早ふ讀でマ、聞かしやいな、ハレせはしいなハレせはしやのどうやら胸がどき〇とヲ、けさは身がぞうとして来た、エ、今迄紙治様に云ふたは皆嘘、誠は主に添ひたい心なれど、所詮添ふては下さるまいと思ひ諦め私計り死ぬる心に覺悟決め、〇可愛や私ゆへ死ぬる心に成つたかいエ、可愛や〇〇〇〇
 〇エ、死ぬる覺悟にさはめ候所どふも心濟み申さず候故太兵衛様の存じの方へ駈落致し暫く身を忍び

〇若も願が叶はずばこの品を形見と御覽下されせめては御回向願上げ、南無阿彌陀佛〇エ、可愛や〇〇〇〇大聲上げすり上げ〇赤子の時に泣た儘二十餘年と六七年と、七八年の太兵衛がタ、タ、溜涙御道理様やと傳海がし〇かんでやる貫ひ泣き身をもむ太兵衛が袂より落散る狀を孫右衛門拾ひ取れ共知らばこそ、コレ才主、わしや小春が書置見たのでやくが差込ヲ、しんき、アイタタ、コレ〇傳海坊貴様の世話にして下さつた、元は是からヲ、そふじや〇太兵衛さんコリヤ手延にしたら死ぬるぞへ書置に書いて有る、お前の存じの所とは心當りがあるかへサア其心當りとはム、まだも木の伊じやコレ〇傳海老

も来ておくれサア早ふ〇〇〇〇後先委細かまひなくあたふた出るを孫右衛門、門の戸びつしやり、詞アイヤコレ、太兵衛どんちよつと待て貰ふ、ヤイ〇賣主め用が有そこへ出いと云はれて俄に胴ぶるひがた付膝をふみメ下詞ハイ、何にも御用はない筈じやがヤイ我が名は傳海といふなエ、ン夫が何とぞ致したかへ、コリヤ清水の浮無瀬で坊主客になつたわ併しぢやな、アノ太兵衛と一つで有ふがな、イエ〇〇〇〇めつそうな〇太兵衛様とやらタ、太郎兵衛様とやら、つひに見た事もない人、ヲ、其見た事もない太兵衛がコレ傳海坊貴様の世話にして下さつた元は是からヲ、そふじや〇太兵衛様、手延にしたら死ぬるぞへとうぬは又何で受

答ひろいだ、サア夫れはとはまだ
見せる物有ると、拾ひし手紙押
し開き、一寸申上候、此間浮無瀬に
て給りし十兩は最早此間の勝負にな
められて仕舞候故、今日紙印方にて
彼の預り手形の義首尾よく参り候は
じ、又々十兩御貸し下さるべく候、
直に申すも如何と御願斯の如くに御
座候太兵衛様、傳海より、何と是
でもあらがふかと、問ひ詰められて
文句も出ず、落した太兵衛は後日の
難儀と、取にかゝるをまつかせと入り
身に成つてかつき投げ支ゆる傳海肩
車、打すえられて二人はひい、心
地よくこそ見えにける、孫右衛門猶
二人をねめ付けたりひるいだ白紙
の贖筆うぬらが工み有り様にサアぬ
かせ、ぬかさにや箒と、振上ればア

申す、ぬかします、アイ太兵
衛さんに頼まれて。坊主客になつた
わ、用水桶の底抜ハイ、みづからぢ
やわいな、ヲ、そふで有ふ、よう
いふた、スリヤこれなりに濟してや
るイヤナニそこなやつし殿も重ねて
治兵衛に云ひ分はないかい、イヤモ
勿體ない、是迄小春がなびかなんだ
色の意趣エ、ほんにやれ、戀程せ
つないものはない、コリヤ二人なが
ら顔を上げい、ム、ハイ、儕等マア
よい獄門頸ぢやな、ム、ハイ、よふ
似合ひますかいな。アエ、たわけ
め、小まごと云はずと早く歸れと二
人を引立て孫右衛門、門へ突出し詞
イヤナニ小春の親分どん貴様達にや
言分ない、心任せにいんだ、ハイ
始めて参じましておやかましろ

存じます、もうお暇と表に出サアコ
レ、太兵衛様遅いと小春が死ぬるわ
いな、早く身受を、アイノ夫もよふ
合點して居る、シタが大金持の此太
が、この様は何事ぞい、傳海、太兵
衛様エ戀故ぢやなアと、何をいふや
らたましいと、俱にぬけたる腰の骨
互にいたわりいたわれ、ちんはち
が、太兵衛様よつ程惚られさつ
た、傳海どえろうどやされさつた、
仇口交りそろ、と木の伊をさして
歸りけり、道引違へいきせきと、お
さんが母は内に入りコレ孫右衛門、
こちの親父五左衛門殿、年寄の氣は
いらく、早ふ安否を聞きたいと、昔
堅氣でやかましい、ム、御尤で御
座ります、イヤモー、治兵衛が事は
御安堵なされ、小春が事も何も斯も

皆埒があいて仕舞眞人間になりまし
 たわいのと開て母親打ほゝ笑ヲ、そ
 れは嬉しいい忝いが逆も心落付る爲
 親父殿へ面晴にどうぞ誓紙が書いて
 欲しいわいの、イヤモ何が扱何ん時
 でも書きませふと、さうくくく
 〳〵と書認め、母が前へ差し出せば
 手に取つて讀下し、ム、誓紙はたし
 かに請取ました、サア孫右衛門連立
 つて行ませふム、ホンニついでに孫
 も一緒に連れて逝ね、早う歸つて親
 父殿に安堵させたい、是も十夜の如
 來のおかけ、詞是からなりとお禮の
 念佛、エ、南無阿彌陀佛〳〵も
 口ごもる心ぞ直に佛なり。

(床本) 紙屋内の段 (切)

門送りさへそこ〳〵に治兵衛は傍に

あり合す定木を枕轉寢のあたる炬達
 の小はる時まだ曾根崎を忘れずかと
 退るふとんの内さへも涙にしめる其
 風情おさんは呆れつく〳〵と顔打守
 り打守リエ、餘りじやぞへ治兵衛様
 夫程名残が惜なら誓紙書ぬがよござ
 んすなぜにお前は其の様に私が憎ふ
 ござんすへ、ア、コレ〳〵ソリヤま
 あ何を云やるぞいの子までなした二
 人が仲にイエ〳〵憎いそうなく憎
 ましやんすが嘘かいなア。おとムし
 の十月中の亥の子に炬燵あけた祝儀
 逆ソレ處で枕ならべて此方は女房の
 懐には鬼が住か蛇が住か夫程心残
 りなら泣しやんせ〳〵其涙が蜷川へ
 流れたら小春が涙で吞まやらふぞ。
 餘りむごい治兵衛様何ほお前にどの
 様なせつない義理がある逆も二人の

子供お前何共ないかないなと心の限り
 くどき立恨み歎くぞ誠なるヲ、尤
 じや誤つた悲しい涙は目より出無念
 な涙は耳から成共出る成らば云ずと
 心見すべきに同じ目よりこぼるゝ涙
 足かけ〇年が其間露程もりん氣せぬ
 そなたに云も恥しながら此間も曾根
 崎で残らず聞るた小春めがぶ心中。
 今と云今夢も覺め思ひ切てはゐるけ
 れどアノ太兵衛めが急に身請をする
 との噂退て十日も立ば中請出さるゝ
 義理知らずの畜生めが事は心残らね
 ど間屋中の付合にも金の工面に盡し
 故小春を退たの何んのとてえしれぬ
 やつらが口の端にかゝるが無念な口
 惜いとサ思はず涙をこぼしたはいの
 ふエ、そんなら小春様はお前に、あ
 いそ盡し云てアノ太兵衛が所へ行く

咎かへハテきよとくしい其聲はい
のイ、エイナアそんなら小春様は生
て居る氣じやない死なしやんすはい
なへハテ扱何ぼ發明でも追は町の
女房じやアノふ心中者が何の死ふぞ
イエ〜そふじやござんせぬ小春様
にぶ心中は芥子程もないけれど日外
よりお前のそぶり何を云てもうか
〜ともし悲しい目を見よふかと案
じ過して小春様へいとしいと思わん
す治兵衛殿の爲じや程に思ひ切て下
さんせと書くどいてやつた文引かれ
ぬ義理と合點して親にもかへぬ戀な
れど思ひ切るとの嬉しい返事は程眞
實な心で何の太兵衛の所へ行かして
んしよ請出された其儘に死る覺悟に
違はない小春様を殺しては、此さん
が義理立ずどうぞ命が助けたい思案

して下さんせひよんな事どうせうと
始めて明す女房の誠ムウそんならア
ノふ心中と見せたのはそなたの頼か
アイナアホイそりややつぱりおれを
大切からハアそうとは知らず今迄も
義理知らずの畜生のと恨だ心が恥し
いアコレ夫云手間でこな様往てどふ
ぞ殺さぬ様にしてしんせて下さんせ
いな〜ハテ小春が命助かるは百五
十兩せめて半金成り共手附に渡し取
留るより外はないが何を云ても金の
工面に盡きた此身ノウ仰山なそれで
濟なら安い事と立てたんすの小引出
し明て取出すないまぜの紐付帛紗お
し開き差出す一包、治兵衛取上びつ
くりしロリヤコレ小判五十兩どふし
てそなたがサア此の金の出所も後で
語れば知れる事此晦日に岩國の仕切

金がさいかくはしたれども、それは
兄様と。だんごうして商の尾は見
せぬはいな小春様の方は急な事ソレ
其小判五十兩と残り。わしがと。
かい立つて、あけて取出す染小袖兼
て、斯とは自茶裏黒羽二重も色かへ
ぬ淺紫の糸目結びつた鹿の子もお
しげなふ子供のものもかい集め内端に
見ても甘雨よもや貸さぬと云ふ事は
ないものまでも、ある顔に夫の恥と
我義理を一つに包む風呂敷の内に情
ぞ籠ける私しや子供は何着ても免
角男は世間が大事身請して。あの太
兵衛に一ぶん立て下さんせと云へど
いらへも涙聲ア、過分ぞや忝い手
付渡して取留請出して圍て置か内へ
入るにしてからがア、そなたは何と
と云さして打しほるればア、何のい

なア心案じて下さんすなへハテモ子供
の乳母が飯焚か面倒ながら眞實の
妹くく持つたと思ふてと。云
ふ胸まで突きける涙存込くで夫に
立る貞節は傍で見る目もいぢらしき
エ、何にも云ぬコレ女房共親のばち
天の罰佛神の罰は當らず共、マ女房
の罰が恐ろしい、赦してたもと斗に
て、伏拜む手を、ア、コレ旦那どの
何しやんす勿體ない勿體ない事
して下さんすないなモく手足の爪
を放しても皆夫への爲じやもの後の
間ではせんない事サアく早ふと三
五郎呼出し渡す風呂敷懐へ金押入
れて立出る治兵衛殿お宿かと門口這
る五左衛門ヲ、是はしたり舅殿マア
よふ御出も夫婦はうちく三五郎が
脊負たる風呂敷見付てコリヤあほう

め其包みどこへ持つて行く又質屋へ
うせるのかこつちへおこせと引たく
られびつくり拍子拔参りの背に知れ
たる心地にて一間の内へ入舅は猶も
興に乗つて、大方斯であらふと思た
はい着類着そげを質にまげてお山狂
ひに仕上るのじやなお山狂ひに、コ
リヤヤイ女郎の誠とな鬼瓦の笑ひ顔
とはない物じやぞよサア手短におさ
んに暇やりや女の子は母へ附が世間
の大法ジャガおすえはさつきに、祖
母が連れて戻り此誓紙をひけらかし
ておれに渡した。ア、えらい様でも
さすがは女こんなで行のじやないぞ
よサア誓紙の替りに去狀書。あんだ
らくさいと引裂く治兵衛が顔へ打
付てお上にどうさり大白なり。おさ
んは聞衆コレと様ソリヤお前聞へ

ませぬはいなくこちの内身體の
おとろへたのも皆お前からおこつた
事ないもせぬ銀山にかゝつたと云て
三十兩借五十兩借あげくは其銀山
がつぶれたとやら元も子もないよう
にして仕廻くやんしたぞへ男氣な治
兵衛殿舅の事なり云出せばこつちも
恥と證文も残らず戻し濟さしやんし
た其時にはコレ此恐い顔に涙をこぼ
して悦ばしやんした事を、おまへよ
もや忘れはさしやんすまいがのお前
又主の悪所通ひも元の起りはこなさ
んから起つた事れつきと仕分て貰ふ
た身體何して金が減たぞと本家の不
審が立つた時ハイ舅殿に取れました
は鼻毛らしう云れもせず口へ出し
て云こそさつしやらね志を推量し
て初手の間の茶屋通ひは世間へ聞へ

にもさつしやる事かとほんにやれ
く行しやる度く。わしや後か
ら拜んで居た拜んで計りたわいな
く其大恩を打忘れあほうじやのイ
ヤたわけのと假初にも勿体ないこら
へて下されこちの人。と様遊で下
さんせと。なだめつ阿つゝ兩方へ我
身一つの。せつなきつらさ思ひやら
れて道理なる思ひは同じ。うき思ひ
身の云譯に紀の國屋小春はこゝへ來
かゝりて様子ありげな内の体逢ては
いかゞと用水の蔭に隠れて閉居たる
とは知らずして治兵衛は手を突御立
腹の段は御尤おさんが申は皆むだ
事私心に存ぜぬ事此儘濟せて下さ
れと詫れど聞ずイヤならぬはい。何
にも云ふ事聞事なはい。おさん戻
せば事はすむが併拵へおこせし道

具衣裳改めて封付んと立上ればおさ
んは驚きア、コレと様衣裳道具も
揃ふてあるエ、モウ改めるには及ば
ぬとかけふさがれば、つき飛しくつ
と引出したコリヤどぶじやと一重二重
引出しの數もありだけ押し込底を敲
いて五左衛門口あんぐりと明入物指
にもさゝれず言葉さへ屢し呆れて居
たりしが治兵衛とつくと心を定めコ
レ舅殿此五十兩は女房おさんが衣裳
道具のかはり不足にはあらふが持て
ござれエ、ハ、ハ、ハ、そふはかいへ
、、、そふはかいハ、ハ、ハ、イヤ
又どう云ても大身体じやつてのがこ
のしだらを見るからは、いよゝゝ娘
は連て歸サア、うせふと引立れば
マア、待て下さんせ、いなアモ
あゝ云ひ出してはきかぬと様わた

しやマア歸ります云迄はないけれど
勘太郎が事くを頼みますぞへ朝敵
前に忘れずとなナンレ桑山の丸子
く吞して下さんせへム、氣遣ひ仕
やんなマア思ひも寄らぬ今此時義と
んと心も落付ねど、そんなら暫く別
れて居よ舅殿も娘の事まんざらむご
ふもさつしやるまいツイまた戻りや
る様に成ぞいのアイくくくく、な
コレ申治兵衛様必ず短氣の出ぬ様に
エ、小面倒な暇ごひサアきりく、歩
めと引立る聲に目覺す勘太郎かゝ様
かゝさんのふを聞捨に後に見捨る子
を捨る數に夫婦の二股竹永き別れと
ハア出て行、しほれく後影見送
りく小かげより小春は内へ駈入ば
ヤアそなたは爰へどふくてと尋る内
にも稚子がかゝ様のふとしたふ子を

見るに二人はいとゞ猶ひくずをれ抱しめ透せば、すやゝ種子を。いぶりながらもくどき言エ、ツウともふ何から云ふぶ治兵衛様此間も曾根崎で相想盡しな悲しい別れ思ひ切てはゐるけれどあの太兵衛に身うけしられては所詮生てはいぬ覺悟此世の名残りに。たつた一目と來事は來ても折あしく立聞した内の様子あれ程貞女なおさん様にあふぎの別れさせますも皆私から起つた事コレ勘忍して下さんせゝサイノ眞實な入譯を聞は聞程此身の誠りあの様な女房が三千世界にあらふかいのふ此言譯にはそなたもおれもスリヤこな様も覺悟極てエ、忝ふござんすと抱しめたるないじやくり胸とゞくに云せけり高砂や此重箱に餅入て片言まじり。

あほふの三五郎机に乗し三ツ具足兩手に抱へ二人が眞中サアゝゝ氣疎い物に成たじやないかへアノさつきにおゑ様ん云んすにはコリヤ三五郎よおれが留守になつたら大かた小春様がござんす程に。そふしたらアノ且那樣とアノソレいまのム、祝言さすのじや我を頼と云ておかんしたはいな、そこでおれが思ひつきじや花瓶の松に鶴龜酒の取りたがなかつたさかいで水を銚子に入れて來た媒役のエ、おれ様じやコレ禮には好の虎屋まんぢうコレ今からあほふと云んすなへゝサアゝ早ふ呑んせゝゝハ、ア二人ながら泣んすア、コレないのゝようござすかハア扱はコリヤ嬉し涙じやのアイノこな様が云んす通り嬉し涙がゝこぼれたは

いのふ、去ながら治兵衛様と祝言してはなどふもおさん様へエ、何のマア濟ぬ事はござんせぬはいのおゑ様は出しがらに成て是ほど味い鯨節をお前にやらんす事じや物志を無足にせずときりゝ呑でさゝんせいのゝゝいのふム、コレヤ三五郎が云通り祝言じやと思へば義理もあるが、互に末期の水盃ムさらばお酌を申さふかい。涙ながらに取上る酒と水とはかはらけの土になる迄葬禮の本花や鶴龜の蠟燭立も消る身と思へばいとゞ胸せまるサアゝ目出なつて來たワイエ、誰ぞマア謠唄がこいでなと見やる外面へ四ツ子の墨の衣に、わらじがけ安養寺尼寺常念はつちソリヤコソ來たいとおほふはかけ出抱て這入のを顔見て恟驚やお末

じやないか。わりや一人戻つたか。

そふしてマアかはつた風をしておる

なアイぢいさんにこんな美しい着物

仕てもらふた、餘り此べは白いに

よつて何やらたんと書て下さつた此

書たのを。と、様や伯母様にちやつ

と見せてこいと云て祖父様が門口迄

つれて来て下さつたはいのふヤアと

二人は立寄てあたふた脱す墨染の下

には何が白無垢におさんが筆のちら

し書、エ、ナニ〜涙ながらに一筆

しめしまいらせ候エ、アハ、さき

程父様連立歸られ候節小春様御忍

ばせの委確に見請候へ共御存の

譯合故御目もじも成がたく書殘し申

上まいらせ候ア、コレ治兵衛様一

寸マアわたしにも讀まして下さんせ

〜いなア、エ、ナニ〜とかく連

合の命が命けたさ小春様へわりなき

お願ひ申上候ひしにお開届給はる

禱しき海山にもかへまほしく何ぼう

忝ふ存上まいらせ候エ、この御

恩を送り候には末々お二人を御夫

婦となしまいらせ候〜よりほか

なくと存じ候エ、その上父様の眞

實をき、我がことはこれ迄の縁と諦

めまいらせ候又お末ことはこなた

乳にて育て申べく候勸太郎が事を

小春様へくれ〜も頼上まいらせ

候エ、コリヤマア何の事じやぞい

のなソリヤ聞へませぬはいなおさん

様私しやお前からお禮請る覺はない

コリヤマア私を術ながらすかいな

〜〜コレイナアコレ治兵衛様ど

うぞまあおさん様を呼戻して下さん

せ〜〜と立たりみたりうろ〜

と譯も涙にくれ居たる治兵衛は又も

引よつてエ、ナニ〜身五左衛門申

入候エ、アの舅親父の思知ずめう

ぬがろくな事書おる物でア、コレそ

のやうに腹をたてずと一寸呼でみや

しやんせ〜なエ、とんともう面倒

いエ、身五左衛門申入候六年以

前あたはぬ銀山にかゝり御損失を掛

候處舞身の由縁を以て證文殘ら

ず返し下され千萬忝存じ奉候

フ、ん知た事ぢやわい金子の減少本

家への聞を思召それ故の遊女通ひ始

め嘘が誠と成は我人若年の時を思ひ

出し申候ア、成程エ、先頃娘に右

の入譯委細に承知仕候故輕少な

がら金子百五十兩先刻衣裳相改め候

節たんすの大引出し〜差入置き申候

ア、コレ小春〜あのたんすの引出

し明けて見やサ、早うしやいのいゝやいの其下の方じやわいのム、ほんに愛に入てござんすエ、あるかエ、右金子を以て小春殿を請出しア、コレ小春一寸マアコレを見やいの右金子を以て小春殿を請出し長く御添下さるべく候エ、娘さん事はお末諸共今日日に致しヲ、コレ小春くおさんが尼になつたといのくエ、おさんが尼にならしやんしたら私や何とせふぞいなジャテ、この通りおさんが尼に成ると書いてあるおさん様が尼にならしやんしたらわたしやどうしようくくくぞいなあゝでも、おさんが尼になつたといのくくくエ、娘さん事はお末諸共今日日に致し貞玉智月と法名付天下茶屋尼寺安養寺へ連行先刻下され

し五拾兩は二人の者の飯料即寺へ詞堂に上申候皆迄讀ず兩人はわつと斗に聲を上そりや胴慾なおさん様是まで情氣もなされずに逢して給はる其御恩聞入たるがかせになり。こんな事なら其時になせそふ云ては下さんせぬコレナア申治兵衛様おさん様を呼戻し千年も萬年も添とげて下さんせ此子は可愛エ、マアないかいな見れば見る程いたいけな愛にこぼるゝ稚子の乳房にはなるゝいぢらしき孤子となしたるは皆私からおこつた事勘忍してと斗にて取亂したるわび涙理せめて哀れる。折からうそく善六。太兵衛、門口細目にこりや見付たヤイ治兵衛めおれが請出して女房にする小春うぬは又何で引込込引込んだア、コレ太兵衛様く

こま言云にや及ばぬ是迄重々意趣ある治兵衛めぶち殺して腹いよと双方よりぶちかゝる利腕掴んでコリヤく三五郎く小春に怪我をさせぬ様働け働けヲツトまかしよと箒の助太刀あなたこなたをちらくくと見る目あやふく氣をひやすいらつて打込善六太兵衛折よくはづせば二人はどし打そりや治兵衛めが切おつたとわめけばせひなく乗かゝり日頃の意趣ととゞめの刀コリヤく三五郎よくお末を連れて奥へ行くコレ小春くコ、へおじやくくエ、何にもこはい事はないくはてこわいことはいわいの斯成上は是非に及ばぬ、最後は綱島の大長寺人なき内にサアおじやと手を取急ぐ惡縁の末は涙のもしを草嚙の種と成にけり。

妹脊山婦女庭訓

花渡しの段
山の段



妹脊山婦女庭訓

竹本大隅太夫
豊澤廣助

人形

大判事清澄 吉田榮三
後室定高 吉田文五郎
入鹿大臣 桐竹門造
彌藤二 吉田玉米
註進 吉田玉徳

此の曲は明和八年正月書卸され「妹脊山婦女庭訓」の三段目の切で、作者は近松半二、松田はく、榮善平、近松東南の四名で、外に後見として三好松洛が行年七十六歳と肩書して名を出してゐる。この淨瑠璃は王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地づくから紀州春山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の少貳國人の後室が、國境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつゞけてゐたが、清澄の伴久我之助清舟は何時しか國人の遺子の雛鳥と

戀愛關係を結ぶ。然るに當時國政を左右してゐた蘇我の入鹿が其の權政を頼んで雛鳥を後宮に迎へやうとして其の手段として清舟に難題を言ひかけて自滅させると、雛鳥も入内を拒み、清舟に操を立て、母の手にかゝつて蕾の花の身を散らすといふ筋で芝居などで上演の時は兩床の懸合で多く勤める重いものである。

(床本) 花渡しの段

地奈良の都の八重九重。禁裏守護の太宰の館。入鹿公のお成とて。フシさゝめき渡る奥女中。地召に應じて大判事清澄。袴の装積も角菱ある、不和なる中の定香が屋敷。互に夫と自書院。フシ目禮もせずつゝと通り詞入鹿公の御座の間へ、誰ぞ案入

仕れと。地言捨て、行かんとす。定香聲かけ先づ暫く。詞珍らしや大判事殿。太宰の少貳が跡目を預る妾が屋敷、挨拶もなくお通りは女と思ひ侮つてか。但し武家の禮儀御存じなくば少と御傳授申さうかと。地詞の非太刀、フシ打掛捌き。地騒がぬ清澄空騒ぎ。詞少貳存生より領地の遺恨に依り。此屋敷の内へは今日迄足踏もせぬ大判事。入鹿公のお召によつて参つたは御説を重んずる故。御殿へ出仕の心。女童に用なければ挨拶する口は持たぬ。イヤそれなれば猶もつて。今日入鹿様お成なれば大内も同然。大判事に御疑ひの事あつて、此定香に吟味致せとの御説。此詮議濟まぬ内は一寸も御前へは叶はぬお控へなされ清澄殿。ム、ハテ

珍らしき事を聞く。君御詮議の筋あらば檢非違使に仰せて。拷問あらんに何の御遠慮、元來御疑ひ蒙るべき覺えなし。生緩き女の吟味、受ける様な清澄でおりない、お身見事詮議して見るか。ヲ、太宰の後家此定香が。吃度詮議して見せう。イヤ小猿な、其處退いて早や通せ。罷りならぬと根に持つ遺恨。地互に折れぬ。老木の柳、松の間の袂押し開かせ出御なりと警蹕の、聲に二人も飛び退り恐れ。フシ入つたるばかりなり地入鹿の大内寛然と。上段の梅より遙に見下し。詞ヤア大判事、未明より参内せよと上使を立つるに甚だの遅参。アレ見よ今日は牛の上刻。流星南に出でて北に掛するは、萬乗の位に郎く丸が吉星。それ程の事知

らぬ大判事でなし、但し、入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退かん下心か、緩急なりときめ付ければ。コハするとは云ひながら、いまだ殘黨先君に心を寄する族あつて、大都を窺ふ折から、我等が領地紀伊國は、西國南海の咽首にて大事の切所。弓を張り矢尻を磨くに隙なければ思はざる遅参。其上忠臣第一の大判事に。何事の御疑ひと、フシ憚なくぞ申しける。詞ホ、其仔細といへば、先君の寵妾采女の局を、丸が妾に定めんと行方を専ね求める所。猿澤の池へ入水せし由。いかにしても合點行かず。察する所采女が所在は大判事其方がよく知らうがなと。地思ひがけなき疑ひに、清澄不審の眉を擧め。詞コハ存じ寄らざる儀。其采女の御

事は、猿澤の池に捨身ありしとは、誰知らぬ者ごぞなきに。我等が行方存じしなどとは何を目當の御仰せなるぞや、ヤアとぼけな。汝が伴久我の助は采女が附人ならずや。其親たる其方なれば、よも知らぬとは言はれまじ。サア眞直に白狀せよ。陳ずるに於ては計ふべき旨あり。イヤなう大判事殿お聞きありしか。妾に仰せ付けられし詮議とは此事。サア覺えがあらば申されよと地言はせも立てず。イヤ點り召され詞女の差出る所でなし。イヤ御説を受けての詮議なれば。上答の有無に依つて、其座はちつとも立たしはせじと。地膝立直し詰寄つて。フシ双方挑み争うたり。地入鹿大臣大口明き。ハハ、詞イヤ巧んだり拵へたり定香が領

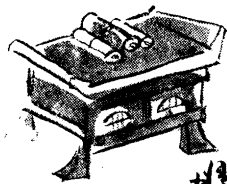
分大和の妹山。清澄が領地紀の國春山隣國境目の論に依り、互に確執せしとは表の見せかけ。内々には申合せ、故主の君へ心を通はす汝等と、我が眼力に違ひはせじ。さすれば君采女は兩家の中に隠し置かんと知ざる故。大判事が詮議を申付けた定香コリヤ其方にも此疑ひはかゝるぞよ。是は又君の御説とも覺えませぬ。それ少貳より中悪き大判事殿。何故申合さう様もなし。地に返お疑ひは恐れながら。詞言ふな女め。左程音信不通の申なるに。大判事が伴久我之助。其方が娘雛鳥と。密通致し居るは如何に、イヤ知るまじと思ふか。伴共が繩に繋がれたる汝等なれば、兩方ともに吟味は遅れぬ。地何と肝に徹うがと。飽迄邪智の一言に

何思ひけん大判事席を蹴立て行かんとす。隙さず定香が刀の錆むんと取り。詞コレ待ち給へ清澄殿。氣相かへてコリヤ何處へ。何處へとは。親々が不和なる中を存じながら、忍び逢ふ伴が不所存、引捕へて吟味せねば。子供が縁を幸ひに和陸せしと言はれては、我が家の恥辱となる。ヲ、そりや此方も同じ事、一旦は武士の意地。今更仲が直りたいばかりに娘に態と不義させしと。世上の人に蔑せられては、過逝き給ふ夫へ立たぬ。地妾も共にと裾引上げ、駈出す二人をはつたと睨め。詞私の趣意に立騒ぐ尾籠やつ。汝らが伴の不義を吟味はせぬ、丸が尋ぬるは采女が所在、サア何れからなりと早く言へ。何とくイヤ伴が性根はいざ知

らず、采女殿の儀は曾て存せず。我が詞に偽りあらば弓箭神の御罰を受けんと。地刀すらりと抜放し、丁々と金打し。詞此上にも御疑ひあらばいか程の拷問なりとも、サア遊ばせとどつかと座す。ヲ、妾とても少貳が妻、家に換へて采女殿は匿はぬ。水責火責に逢ふとも、知らぬ事は存じませぬとフシ詞するどにいひ放す。詞ム、然らば采女が詮議は追つて、先づ汝等が面晴なれば、匿はぬといふ潔白に、定香は雛鳥を入殿させよ。又大判事も覺えなきに相違なくば、久我之助は今日より、丸が目通りへ出勤させよ。急度其旨心得よと。地何がな探る當座の難題。之は胸にぎつくりと、答へもフシ暫しなかりしが。地やゝあつて詞を揃へ

詞斯く有難き御説を互の子供が違背致さば。ヲ、地言ふにや及ぶと邊なる生け置く櫻の一枝押取り詞得心すれば榮える花。背くに於ては忽ちに丸が威勢の嵐にあて。まゝ此通りと欄に。地はつしと打折り落花微塵はつとばかりに親々の。心も共に。フシ散亂せり。地猶もゆるまぬ大音上げ。詞ヤア、彌藤次早く參れ。汝は百里照の目鏡を以て。香具山の絶頂より急度遠見を仕れ。コリヤ、兩人よつく開け。若しわしでも容赦致さば兩家は沒收。從類までも絶やするぞ。地性根を定め早や行けと、せき立つ詫意に親々の思ひは千々の胸の中、見せぬおもてに忠と義を、張り詰めし氣のたゆみなく、打連れてこそ。フシカ、リ出でゝ行く

誠に秦の趙高が、馬と欺く小牡鹿の入鹿が威勢ぞフシ類ひなき。地かゝる所へ中門より追々駆入る鎧武者。御注進と呼ばはつて、御白洲に頭を下げ。詞河内の國に武智郡司安彦。下先君に味方をして大島の成に籠りしも、官軍残らず馳向ひ、敵を攻付け一晝夜に落城。大和に安墨の文次宗秀。當麻の邊に陣を取り。地南郷を攻むる其結構。馳向うて戦ひしに。味方の官軍利を失ひ。残らず敗北仕ると息つき敢ず言上すれば。ハ、ハ、。詞物數ならぬ逆徒の奴輩。馳向うて微塵にせんぞよ。かの穆王が龍馬に勝れし。希代の名馬。吉野の牧より狩出したる。其馬引けと廣庭へ引出させ。地欄より。ひらりとフシオクリ打乗り。名馬の勇み。合手



も

脊山の段

大判事 竹本津太夫
鶴澤綱造

久我之助 竹本織太夫
竹澤團六

妹山の段

定高 豊竹古靱太夫
鶴澤重造

琴 竹澤團六
竹本伊達太夫

雛鳥 鶴澤友衛門

綱かいくりしとくく。合轡の音はりんくく。偷言誰か背くべき大地狭しと馬上の勢ひ。刻む蹄も街の御。いざふれ。やつと出陣の駒を早めてかけり行く。

(床本) 山の段

M 往古の、神代の昔山跡の、國の都の始にて、妹春の始め山々の、中を流るゝ吉野川。塵も芥も花の山、げに世に遊ぶ歌人の言の葉草の捨所妹山は、太宰の少貳國人の領地にて川へ見越の下館。春山の方は、大判事清澄の領内。子息清舟日外より、爰に勸氣の山住居、伴ふ物は巢立鳥。御と我と只二つ、経讀む鳥の音も澄みて心細くも哀なり。頃は彌生の初つゝろ、此方の亭には雛鳥の、氣を

慰めの雛祭り。桃の節句の供物の萩の強飯侍女の小菊、桔梗が配膳の腰もすうはり春風に、柳の揚枝端近く詞の小菊、平常のお雛は御殿でお祭なさるれど、姫様のおしつらひで、此山屋の假座敷、谷川を見晴し、櫻の見飽き、雛様も一人お氣が晴れて可からうの、此方も追付け好い殿御をもつたら、常住あの様に引付いてゐたら嬉しかる。フウ桔梗の何いやるやら、何程女夫並んでゐても、あの様に行儀に畏つて斗りゐて、手を握る事さへならぬ、窮屈な契は厭や、肝心の寝る時は、離れくの箱の中、思の断える間はあるまいと、仇口々も雛鳥の、胸にあたりの人目堰く、辛い戀路の其中に、親と親とは昔より、御中不和の關となり、逢

人形

久我之助 清舟 吉田 玉幸
 娘 雛 鳥 桐竹紋十郎
 こし元 小菊 桐竹紋太郎
 こし元 桔梗 吉田文之助
 大判事 清澄 吉田 榮三
 後室 定高 吉田 文五郎

ふ事さへも片糸の、結ほれ解けぬ我思ひ、戀し床しい清舟様、此山の彼方にて、聞いたを便り母様へ、お願ひ申して此假屋。お顔が見たさの出養生、爰迄は來れども、山と山とが領分の境の川に隔てられ、物云交す事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ。今は却々思の種、いつそ隔てゝ戀ひ乍びる、逢れぬ昔が勝ぞかしと、切なる思ひ搔くどき、歎けば俱に侍女共、お道理でござります、ほんにひよんな情事で、隣同士の紀の國大和御領分の競合で、詞お二人の親御様は摺れく、雛鳥様と久我様の、妹脊の中を引分くる、妹山香山、船も筏も御法度で唯だ此川一ツ、つい渡られさうなもの、小菊瀨踏して見やらぬか。ヲ、滅相な、此谷川の逆落し

紀州浦へ一とときに、流れて往たら鯨の餌食。したが申し雛鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此假屋の出養生さしなさつたは、餘所乍ら久我様にお前を逢す後室様の粹なお捌き。女夫にして下さりませと直にお願ひ遊ばしたら、よもや厭とは岩橋の、渡る事こそならずとも、切て遠目にお姿をと。障子ぐわらりと縁端に覗き溢るゝ侍女共、久我之助はうつゝと父の行末身の上を、守らせ給へと心中に、念彼觀音の經机、案じ入つたる顔形、手にとるやうに。嗚あれ。詞机に凭れて久我様の、物思はしいお顔持。お癪がな發りつらん。詞エ、お傍へ行きたい、コレ爰にゐるわいなと。いへど招けど谷川の漲る音に紛れてや、聞えぬ辛さ

詞エ、辛氣、此方が思ふやうにもない、コレコツちや向いて見たが可いと焦燥のお傍に氣の付々。詞ほんんと夫よ口ではいはれぬ心の丈、豫て認め奥山の鹿の巻筆封じ文。戀し小石に縛りそへ、女の念の通ぜよと、祈願を籠めてうつ礫。からりと川に落ち瀧津、波にせかれて流れゆく。詞エ、どんな、心の念は届いても、女の力の届かねば、思ふた斗り片便り、返事を松浦佐用姫の。石になりともなりたいとひれふす山の效もなき。久我之介川に目を着け 何處よりか水中に打つたる石は重けれど、逆捲く水の勢に、沈みもやらず流るゝは、ム、重き君も、入鹿といふ逆臣の、水の勢には敵對難き世時の習夫を知つて暫しの中、敵に従ふ父大

判事殿の心。善か悪かを三つ 柏水に浮めば願叶はず、浮む時は願成就吉野を假の御被川。大神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘取つて、谷を傳ひに水の面。見遣る女中が、申しへ下なさるゝ。あの岩角の折曲りが川巾がいつち狭い、幸の好い逢瀬といふに嬉しさ雛鳥の、飛立許り振袖も、裾もほろ／＼坂道を、折柄風に散る花の、櫻が中の立姿、しだけ難處も厭なく、喟う久我様か懐かしやと、いふに思はず清舟も、雛鳥無事とと顔と顔。見合す斗り遠き間の、心斗りが抱合ひ、詮方涙先だてり。詞申し清舟様、わしやお前に逢たさに病氣と云立て、爰迄は來ておれど親の許さぬ中垣に、忍んで通ふ事叶

はず、女雛男雛も年に一度は七夕の逢瀬はあるに此のやうに、お顔見ながら添ふ事の、ならぬは何の報ぞや妹春の山の中を隔つる、吉野の川に鵲の、橋はないかと口説言。聞く清舟も楫あらば、早渡りたき床しさを、胸に包みて。詞道理。我も心は飛立てど、此川の法度敷しきは親々の不和斗りでなく、今入鹿世をとつて、君臣上下心々、隣國近邊と雖も、親みあらば徒黨の企あらんかと、互に通路を齎めて、船を泊たる此川は、領分を分ける關所も同然命だにあるならば、又逢ふ事もあるべきぞ。今流したる水の柏、波に探れて浮みしは、心の願ひ叶ふ報せ。入鹿が控殿しければ、我も世上を憚りて、此山奥の隠れ往。心の儘に

鶯の聲は聞けども籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を、思遣れよし鳥と。儘ならぬ世を怨み泣。詞喃、又遇ふ事もあらうとは、別るゝ時の捨詞。假令未來の父様に、御勸當受けるともわしやお前の女房ぢや。逆も叶はぬ浮世なら、法度を破つて此川の、早瀬の波も厭ふまじ、何處如何なる方へなと、連れて退いて下さんせ。詞私はその處へ行ますと、既に飛込む川岸に慌て驚き留むる侍女。イヤく放しやと泣入る娘。詞ヤレ短慮なり雛鳥、山川の此早瀬。水練を得たる者だに渡り難き此難所。忽ち命を失ふのみか、母後室に歎きを懸け、我にも愈憎悪が、懸る科を重ねる道理に必ず逸り召れなと。制する詞一筋に思詰たる女氣も、今更弱る折こそあ

れ。詞大判事清澄様御入なり、Mと報する聲。はつと驚き久我之助、歸るも名残、押留むるも我身を我身の儘ならず、コレ喃待つての聲斗り後室様お出と、告ぐる下部に詮方も泣くく座のうち惜れ、登る坂さへ別路は、力難所をゆく心地、空に知れぬ花曇り、花を歩めど武士の、心の嶮岨力して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂く、川邊傳ひに大判事清澄、此方の岸より太宰の後室さだかに夫と道分の、石と意地とを向ひ合ふ、川を隔て、詞大判事様、お役目御苦勞に存じますと、聲縮襦もかい取の、夫の魂放さぬ式禮。清澄も一楯し詞早かりし定香殿、御前を下るも一時、參る所も同一なれども、此香山は身共が領分。妹山は

其元の御支配、川向の喧嘩とやら、睨合ふて日を送る此年月、心解けるか解けぬかは今日の役目の落去次第ニツツの勅命、狼狽へた捌召るなと、眼背ぐしやつく美道。脇へかはして仰の通り。詞入鹿様の御詮意はお互に子供の身の上、受合ふては歸り乍ら、身腹は分けても心は別々、若あいと申さぬ時は、マアお前には何麼せうと思し召す。知れた事、御前で承つた通り首打放す分の事さふ所存な悴は、有つて益なく無うて事缺けず、身の中の腐りは、殺いで捨てるが後の養生、畢竟親の子の名をつけるは、人間の私、天地から見るとは、同じ世界に湧いた虫、別に不憫とは存じ申さぬ。ハテ強い念ひ断り。私は又いかう了簡が違ひます

女子の未練な心からは我子が可愛う
てなりませぬ。其代りに、お前の御
子息様の事は眞實何とも存じませぬ
只大切な此方娘、忝い入鹿様
お聲の掛つた身の幸、假令どう申
さうとも、母が勸めて入内させ、お
奥様と多くの人に、敬ひ傳かさうと
思へば、此様な嬉しい事はござりま
せぬ、ホ、と、空笑ひ。詞ム、し
て又得心せぬ時は、ハテそりや最う
是非に及ばぬ。枝振悪い櫻木は伐つ
て接木を致さぬば、太宰の家が立ま
せぬ。ヲ、爾うなふては叶ふまい。
此方の悴とても、得心すれば身の出
世、榮華を咲かす此一枝、河へ流す
が報せの返答。盛ながらに流るゝは
吉左右、花を散らして枝斗り流るゝ
ならば、悴が絶命と思はれよ。いか

にも此方も此の一枝、娘の命活花を
散さぬやうに致しませう。ヲ、サ今
一時が互の瀬越し此國境は生死の境
返答の善悪に依つて、遺恨に遺恨を
重ぬるか、さあ是迄の意趣を流して
中吉野川と落合ふか、先それ迄は双
方の領分、お捌を待つて居ます。と
詞時つ親、山と大和路別れても、變
らぬ紀の路恩愛の、惱は霞に埋れし
庵の内に別入る。立派にいひは放し
ても、定かにしらぬ子の心、覺束な
くも呼子鳥、娘々と谷の戸に、訪ふ
初音雛鳥も、母の機嫌を差足に。詞
母様ようぞ、今日はお目出たら存じ
ますと、武家の行儀の三ツ指に堅い
程猶親子の親み。詞ヲ、能う飾が出
來ました、今日は和女の顔持も可さ
さうで、一双目出度い、母も祝ふて

献上の此花供へても、幾歳になつ
ても雛祭は嬉しいものゝ一女子共何
なりと娘が氣に合ふ遊をして、隨ふ
といさめてくれと、何時に勝れし後
室の機嫌は訴訟のよい出機。詞今の
もちやつと乗出して、御覽じませと
侍女に腰押へられても兎やかうと、
いひそくれのもつれ斐。詞イヤ喃
雛鳥春丈延びた娘も親の傍に引付
て置くは病の種、夫で急に思案を極
め、和女によい殿御を持す嫁入さす
が嬉しいか。エ、。ハテ氣遣しやん
な、可愛い娘の一生を任す夫、和女
の氣に入らぬ男を何の母が持さうぞ
ナア侍女ども。ハイ、左様でござ
ります、お氣の通つた後室様、嫁
入の先は大方今のナ、焦るゝ君でござ
りませうと、押し難い當處も得手

勝手、誰にか縁も組紐に、胸に眞紅のふさが有る箱、取出し、妹春も並ぶる鎌の日は、嫁入の吉日、此箱の豆は極る殿御、鎌の御前で夫定め。コレ和女の夫といふは、誰あらう入鹿大臣様じやわいの。エ、爾なら私を嫁入さすとは。ヲ、太宰の少貳が娘雛鳥、美人の聞え淑閑に達し、入内させよと有難い御言。エ、イはつと恠りうろくと、言葉は涙ぐむ計り詞ヲ、膽が潰れる筈、夫と申すも畏多しい上位の方を、躰にとる家の面目日本國に此上のない嫁入の隨一、果報な娘、此様な目出たい事があるものか、ナア女子共。ハイ、お目出たいと申さうかいつそ亂騒ぎでござりますと工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投首の二人は小腹立つてゆく。

母の心も色々に咲分の枝差出し。詞親が許さぬ云交し、淫奔は阿つて返らず、一旦思初めた男、何時迄も立通すが女の操、破りやとはいはぬが貞女の立様がありそうなもの、篤りと能く思案しや。此花は八重一重、互に不和なる親々の、心揃はぬ二ツの花、一ツ枝に取結び、切放すに離されぬ悪縁の仇花、今和女の心次第で、當時入鹿大臣の深山嵐に吹散され、久我之介は腹切ねばならぬぞや雛鳥と縁切つて、入鹿様へ降参すれば、清舟の命も助る。報せは川へ流す櫻、散るか散らぬは身の納り、時に従ふ風に靡き、君が手活の花になれば八重も一重も愚なり、戀しと思ふ久我の介、助けうと殺さうと、今返事の唯一ツ、貞女の立様サア

見たいと戀も情も辨へて、義理の柵堰止めても、涙せき上げ乍ら、母様段々聞えました。お言葉は背きませぬ。爾なら得心して入内したもるか。アイ、ヲ、嬉しや出来しやつた。夫でこそ貞女なれ。馴れぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑はれな今日より内裏上藤の。詞髪も改めすべらかし、祝ふて母が結直して遣ましよと。いそぐ立ち乍ら娘の心思遣り、別れも櫛の果敢なさも解ほどかれぬ憂き思。重き香山の庵の内、父の前に謹んで。詞久我之助が心底聞き召ふゆられ、切腹の赦免下さるゝ事、身にとつて如何許り大慶至極と手を支けば、默然たる大判事、ヤム打濕む目を聞き、詞今朝入鹿大臣、此大判事を召出し、先

帝寵愛の采女、身を投げ死んだりとは偽り、其方が倅久我之介、人知れぬ方へ落し遣りしに極れば、必定汝等が方に隠匿あるべしとの難題、元より知らぬ大判事、よく思へば采女の御難を避けん爲、猿澤の池に入水の體にもてなして、密に落し参らせしは、申々久我之介の智恵でない、鎌足公の指圖をうけての計らひと、知つたは身も今日が始、親にも隠し包みては、大事を洩さぬ心の金打、若輩者には神妙の爲方、ハア、出来たりと思ふにつけ、邪智深き入鹿、久我之介が降参せば、命を助けん連來れと、情の言葉に釣寄せて拷問に懸けん謀計、責殺さるゝ苦みより、切腹さすれば采女の詮義の根を斷つ大功、天下の主の御爲には、

何悴の一人など葎に生へる草一本、引抜くより些細な事と、涙一滴零さぬは武士の面、子の可愛うないものが、凡そ情ある者にあらうか、餘り健氣な子に耻ぢて、親が介錯してくれる。侍の綺羅を飾り、殿しく横へし大小、悴が首を切る刀とは、五十年來知らざりしと、老の悔みに清舟も、親の慈悲心難有涙、命二ツあるならば、君には死んで忠義をたて父には生て養育の、御恩を送り申さん、今生の残念こそ一ツと顔を見上げ見下して、わつと平伏す親子の誠、此方の亭には母後室詞サア、目出たい、和女の名は雛鳥も其儘の内裏雛、装束の着様も、此女雛と見合せて、サア、早うとありければ怨めしげに打守り、女夫一ツは何時

迄も添遂げること雛の徳、思ふお人に引離され、何樂しみの女御后、美の衣の十三重、雛の姿も怨めしと、取つて打付け縁板に、ころりと落ち女雛の首。驚く母の胸板に必死と極る娘の命、包めどせきくる、はらゝ涙、詞娘入内さすといふたは偽りのう。エ、爾ならなく、貞女を立さし下さりますか、エ、忝い有難いと伏拜む手を執つて、喃入内せず死するものも、それ程嬉しがる娘の心しらいでならうか、詞あつと受けても自害して、死ぬと覺悟は知り乍ら、和女の死ぬる事聞いたら、且合ふた久我之助、俱に自害召れうもしれぬ、切て一人は助けたさ一旦得心したにして、母が手づから解い

た髪は下髪じやない、成敗の擡上髪介錯の支度じやわいの。高いも低いも姫御前の夫といふは唯だ一人、穢はしい玉の輿、何の母も嬉しかる。祝言こそせぬ、心斗りは久我之介が、宿の夫と思ふて死にや。是程に思ふ間、一日半時添しもせず、賽の河原へ遣るわいと、引寄せ〜雉鳥も、膝に取着き抱着き、忝さと嬉しさと逢はで別るゝ名残の涙、一ツに落つる三ツ瀬川。川を隔て、清舟が、最期の觀念わるびれず、焼刃直なる魂の九寸五分取直し、腹にくつと突立つる。詞ヤレ暫く引廻すな

此期に及んで左程狼狽へた未練な性根はござりませぬ。去乍ら、今端の際の御願、私相果てしと聞かば、義理に繋かれ雉鳥も俱に生害と申すべし、詞然ある時は太宰の家も断絶、暫くの間乍ら、切腹の義はお隠しなされ降参承知致せし體、後室方へお報知あらば、女も得心仕り、入内致せば彼が爲。不義の汚名は受たれども、是ぞ色に迷はぬ潔白。詞ヲ、出来した、よく氣が注いた、年頃立て、抜く武士の意地、不和な中程義理深し、命を捨つるは天下の爲、助くるは又家の爲。詞氣遣せずと最期を清う。花は三芳野侍の、手本になれと潔く、いへど心の亂れ咲、可憐櫻の若者を散す惜さと不愍さと、小枝に濺ぐ血の涙、落ちて波間に流

れゆく。夫ともしらず喜ぶ雉鳥。詞アレ〜花が流るゝは、嬉しや久我様のお身に心ないしるし、私は冥土へ参じます。千年も万年も、御無事で長生遊ばして未來で添ふて下さんと、心でいふが暇乞。詞思ひ置く事云ひ置き事、最う何にもござんせぬ、片時も早うサア母様斬つて〜と身も惜まぬ、我子の覺悟に勵され胸を定めて執上ぐれど、刀は鞘に錆付く如く、離れ衆たる血筋の羈。今斬殺す雉鳥を、無事と報ずる返事の櫻、同じく川に浮ぶれば。詞ア、嬉しや是ぞ雉鳥が入内の報知〜久我之介が心の安堵、采女の方の御所は最前申上ぐる通り、此世に心残なし御苦勞乍ら御介錯。サア〜母様斬つていの。未練にござんす母様と、

泣かぬ顔する可憐しさ、刀持つ手も
大盤石。思は同じ大判事、子よりも
親の四苦八苦、命も散り、日も
ちり。詞ハア爾うじや、はや西
に入る日輪は、娘がお迎ひ彌陀の來
迎、西方淨土へ導き給へ。南無阿彌
陀佛と目を閉ぢて、念ひきつたる首
諸共、わつと泣く聲應ゆる反響。詞
膽に徹して大判事、刀かくりと落ち
たる障子。詞ヤア鎌鳥が首討つたか
久我殿は腹切つてか、ハア死なした
りと控うと座し、悔むも泣くも一時
に、呆れて言葉もなかりしが、良あ
つて定香聲をあげ。詞入鹿大臣へ差
上たる鎌鳥が首、御檢使受取下され
と、呼はる聲を吹送る、風の案内に
大判事、歎きの姿改めて、衣紋繕ら
ひ徐々と、下立つ河邊の柳腰、娘の

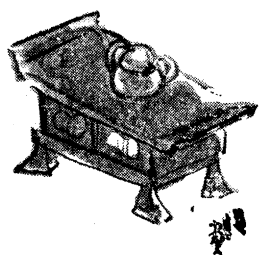
首を擁抱き。詞大判事様、別て何に
も申しませぬ、御子息の御命は何卒
と思ふた效もない、敢ない有様、お
前様のお心も、推量致して居まする
添ふに添れぬ惡縁を、思合ふたが互
の因果、此方の娘も、そひたい
と思ひしに。詞餘り不忠に存じます
せて久我之介殿の息のある中に此
の首を其方へ渡し申すが、娘を嫁入
さす心。實に尤嫁は大和、舞は紀
の國。妹春の山の中に落つる吉野の
川の水盃、櫻の林の大鳥臺。目出
たら祝言さしませうわい、爾なら是
迄の心も解けて。詞ハテ互にあひや
け同士。エ。忝ないと悦ぶも後
の祭、ほんに春丈延びたる者を、何
時迄も、子供の様に思ふて暮すは親
の例ひ、甘やかした雛の道具、一人

子を殺して何にせう跡におく程涙の
種。詞侍女共其一式、残りず川へ流
れ漣頂、未來へ送る嫁入道具、行器
長持、犬張子、小袖箆の幾帳も、
命存へおるならば、合一世一度の贈
物、合五町七町續く程、美々しうせ
んと樂みに、思ふた事は引換へて、
水になつたる水葬禮、大名の子の嫁
入に乗物さへも中々に、形見も仇の
爪琴に、首取載する弘誓の船、彼方
の岸より彼岸に、流るゝ血汐清舟が
今端の顔容見る親の、口に祝言心の
唱名詞千秋萬歳の千箱の玉の緒も、
切れて今は敢なき此死顔。生きてゐ
る中此様に、聳よ嫁よとならば、如
何許り悦ばんに、領分の遺恨より、
意地に意地を立通す、其上重る入鹿
の疑、仲直るにも直られぬ、義理

になつたが二人の不運。詞あれ程思
 詰めた嫁、何の入鹿に從はう、とて
 も死ねばならぬ子供、一時に殺した
 は、未來で早う添してやりたさ、云
 合せなど後室にも是まで不和の大判
 事も、あひやけと思し召せばこそ、
 俵に立て一人の娘、ヲ、よくぞお手
 に掛られし、過分に存ずる定香殿。
 詞ヲ、勿體ない、其お禮は彼方こち
 ら、不束な娘故、大事のお子も御切
 腹、器量筋目も勝れた殿御、夫に持
 つは果報者。とは云乍らあれ程迄、
 手汐に掛けて育てた子を又手に掛け
 て斬る心。詞推量致してをる、武士
 の覺悟は常乍ら、緩急の時は取亂し
 介錯爲後れ面目ない。イエ〜夫で
 目出たい此祝言。是がほんのさう嫁
 入、一代一度の祝言に、舞殿の無紋

の結。詞首斗りの嫁御寮に對面せ
 うとは知なんだ。夫も子供が遁れぬ
 壽命、兎にも角にも世の中の、子と
 いふ文字に死の聲のあるも定まる宿
 業と隔つる心親々の、積る思の山々
 は解けて流れて吉野川、いとゞ漲る
 斗りなり。涙拂ふて大判事、首擡上
 げて聲高く。詞悴清舟承れ、人間
 最期の一念によつて、輪廻の情を引
 くとかや、忠義に死ぬる汝が魂魄、
 君父の影身に附添ふて朝敵退治の勝
 戦を草葉の蔭より見物せよ。今雛鳥
 と改めて親が許して盡未來、五百生
 まで變らぬ夫婦、忠臣貞女の操をた
 て、死んだる者と高聲に閻魔の廳を
 名乗つて通れ、甯無成佛得脱と唱ふ
 る聲の聞えてや、物得いはねど合す
 手を、合せ兼たる此世の別れ。はや

日も暮れて人顔もみえず庵の霧隠れ
 埋む娘の亡骸は、此方の山に留れど
 合首は背山に檢使の役目、我子の介
 錯涙の雫、よしや世の中憂き事は、
 何時か當麻の大和路や 後に妹山、
 先だつ春山、恩愛義理を堰下す、涙
 の川瀬、三吉野の、花を見捨て、出
 で、ゆく。





長町美濃屋の段

豊竹鶴 豊竹駒 豊竹太夫
 竹澤清 竹澤二 竹澤太郎
 豊本綴 豊本太 豊本門
 豊澤新 豊澤左 豊澤衛

人形

美濃屋三勝 桐竹政龜
 半七の伯母 吉田小兵吉

艶容女舞衣

長町美濃屋の段
 酒屋の段

今ごろは半七さんのさはりで知られてゐる世話物の粹であります。上中下三巻からなつてゐますが酒屋は下の巻の上鹽町の段の切になつてゐます。書下しは安永元年十二月の豊竹座で、竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七の合作です。この作の以前に『寶永年間に同じ豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題して上場されてゐます。この段の内容を申上げますと茜屋といふ酒屋の半七がお園といふ女房が有るのにもかゝらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ藝妓に迷ひ

遂に人殺しまでする。お園の父宗岸は鉦の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考へるところがあつて茜屋へ復歸させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む處から事件が展開されて、お園の貞節や、捨兒のお通の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれへと續く名作であります。

(床本) 長町美濃屋の段

此廣い大坂に住所さへ長町と。言の葉種の露ふかき。うらのこがらし吹そらす。みのやとかきし目印の暖簾の文字は太けれど。細き煙のかせ世帯。心に波のたへまなく心一つでとやかくと。夫の遅さ待ちかねて。見

ゆる表へそれならで。色もすがりの句ひある四十餘の女房が。用有そらに表口の暖簾の家名に小うなづき。ちと御免なりませとずつと入。こなさんが舞子の三勝殿といふのか。アイいかにもわたしでござんすが。けふはいかふ取込で。お目にかゝるもそこへ。用ならあしたの事にしてと。我くつたくにあじらひも花のあたりをよけて吹。煙草のけぶりつきほなくいへ共逝ぬ揚口。そろへ上つて傍に寄。ついにあふた事なけれど。五年以來聞及んだ三勝殿。わしや大和の五條西屋の半七がおぼでござる。エ、憮り。ア、それはと。云んとせしが氣味悪く。うるへするを見て取て。イヤこれ三勝殿。若やわしうこなたをば。わりにきた

かと思はしやるが。モみじんもそうした心はない。草で育た大和の女子も。梅のいろよき難波の女郎も。色に迷ふは同じ事、わしやこなさんに禮いひに來ましたはいの。アノ見るかげもない半七にほだされてなんぼの出世も目につけず。かはいがつて下さるを。かげで聞てどの親でも嬉しがるまい様がない。殊にお通といふ子迄もうけた三勝殿。まめで顔見で嬉しいと餘念なければ氣も落付。半七様のおば御様連。さつてもきつい御すいほう。そふ御存の上からは何を隠さん様もなく。しんじつほんのかゝ様に。逢た心と打とけて。底意渚の海士おぶね。こぎあふせたる如くなり。イヤのふ世の中に。君傾城をれさへが。嫁にするも有なら

ひ。ア、互ひにすいた中じや物。半七と夫婦にしてむつまじい顔見るならばと。モ有暮思ふて居まするがと聞て飛立嬉しさに手を合すれば其手を取。思ふ事。儘ならぬこそ浮世なれ。わしやこなさんに無心が有てきましたと。詞の中よりこれはいかな頼むの無心とは他人向。どの様な仰でも背ぬが嫁の役と。いふ顔見るより涙ぐみ。近頃無心な事ながら。半七と縁を切つて下され。エ、アノ半七様とかへ。いかに。イエへそりやならぬわいな。いやじやへエ、わしやいやじや。一夜流のあだ夢も別れも惜き人心、まして馴染もう五とせ。子迄なしたる半七様。炎の中には暮そらがあなたをのいて片時も浮世の日かげが見られふか。む

どいつれない。どうよくな別れといふ字を聞いてさへ胸にしみ／＼悲しいと恨涙にくれ居たる。ヲ、悲しうなふて何とせう。去ながら此おぼが云一通。開て下され三勝殿。アノ半七には、おそのといふて云號の女房が有。呼取てもう三年。祝言の日を極めても。こなたと深い半七。いかな事得心せず。同じ内に住ながら一言もの云ず、て親の腹立無理でもなし。又嫁の親の方からは大事の娘をすもかにして。妾ぐるひする半七舞には取ぬ取戻すとやつさもつさの一門中。其上それを苦にやんで。おそのはとふから氣のかた煩ひ。開ても居てゞござろふが。二月後から此樋の上に出養生。日増に重る病の床見るも悲しさいぢらしさ。せめて一

日夫婦にして。此世の念もはらしてやりたさ。義理と情に詮方なく。子迄有二人の仲を縁切にきた此おぼが心の内を推量して。思ひ切て。見て下され。ヤサ、ハ、かはいがらしやる半七を。不孝者と云そふと。孝行者といはそふと。サコレこゝがしんぼうじや。了簡をして下されと。語るも涙開涙。三勝はたゞうろ／＼とのくも苦しくいな船の。いな共云ず胸せまり涙にむせび居たりしが。つど／＼おぼの詞をば聞に思ひの結ぼふれ。とけぬ水の劔をば、呑込つらさ。せつなさを。こらへ涙の玉の緒もきらねばならぬ縁ならば逢ての上か。とやせんと心一つにせめられて。我と我身に。暇乞むせぶ涙の顔を上。申おぼ様。ふつつりと思ひ切

ました。ヤアすりやアノ。半七と縁切てくださるか。とはれて猶も。ないじやくり。何はともあれわたしのがけば。半七様のお名も出ぬといふ事は。よふしりぬいておりますれど。つるした譯の中でもなし。五年以來なれなじみ子までもうけていつしかに。去年より今年は深ふ成けふはきのふに増思ひ神や佛の御意見でも思ひ切瀬のあらばこそ。親にも。子にも。我身にもかへいとしき殿御をば不孝といはし。お園様のおうらみや。おふたか様のお歎が。あなたのお身にかゝるのが。わしやかなしうてならぬゆへ。あかぬ別をいたします。思ひきらふと思ふ程。戀の罪科思ひのしゆら。胸の煙はあびしやうねつ。八かん地獄の涙のつら／＼

酒屋の段

切 豊竹 豊澤 豊太 豊衛 豊門
 野鶴 野澤 野清 野二郎
 琴 野澤 野清 野二郎

人形

嫁 お園 桐竹紋十郎
 親 宗岸 吉田玉藏
 半兵衛女房 桐竹紋太郎
 舅 半兵衛 桐竹門造
 娘 おつう 吉田玉枝
 美濃屋三勝 桐竹政龜
 酒屋半七 吉田玉市

今身のうへにせめられて。わく方もなき三勝が。心の内のせつなさを推量してたべおば御様。わしや義理詰に成たかと。目元うろく髪亂れわつとばかりの託泣目も當られぬ風情なり。おばも涙にくれながら。せな撫おろし。なでさすり。ヲ、道理じや。のいてくださる佛よりのかしに來た此鬼が最前からの悲しさは行末此身がいくつまで。いきながらへるかしらね共、一度に年も寄思ひヲ、よふのいてくださつたなふ。三方四方の義理も立。いぢらしいめを見ますと。顔見合せてハ、はつと歎涙は湖の一夜に。出來しもかやらん。いつ迄いふても同じ事。もふ泣て下さんなど。しほく立ても、逝ます。半七こそ縁はきれ。

娘のお通も有事なりや心はやつばり變らぬはいの。煩はぬ様にしてくだされや。禮迎は云ね共。今から朝晩此おばが。こなたの壽命を祈ますア、苦しみの世界やと。行んとするを。コレ申。お通にちよつと逢てやつて下さりませ。ちい様やばう様の所へはいつ行事でござるやと。逢たがつた稚心。せめてツイ顔なりと云もおはらず泣入。イヤくモウ逢ますまい。縁切して逝るさへ悲しいに。お通の顔を見たならば。猶悲しうて成ますまい。むごいきついでばじやと。云て聞して下されと。互の涙くりかへし。見送る足も行足も。しどろもどろのうきわかれ泣別れてぞ立かへる。

(床本) 酒屋の段 (中)

古郷は大和五條に名のみして今は浪花の上鹽町、格子造りも小つくり三輪の山本ならね共杉立軒の酒林、味淋、白酒焼酎の看板もからい渡世なり賣場に居眠る丁稚の長太酒壺であたまコツツリアイタ、エ、どいつじやい人のあたまをたつきをつたはどいつじやどいつアたれもまたいたのじやなかつた、おれがでに打たのじやエへ、ヨウ何じや、又弾は隣須賀市が稽古じやそふな何ぞ面白い事をうたへばよいがな

M かはいらしい前髪をあいそもこつそり坊様にせう事もなきうきふしのこゝばつかりに日はてるまいし、へア萬年草をやらかしおるコリヤ面白くよふく味い事、どふぞ長ふ頼みますぞへと體を横に寝はらばい餘念たはいも納戸より立出る此家の女房ヤイ長太よ其なりは何じや、今日は親父殿を代官所からお召で何事が起つた事と内でとやかく案じて居るに其氣も付かぬたわけ者エ、たしなみをれと呵られて俄にしよげりましくしと水はなすゝるばかりなり、早や日も西に片影を歩む姿は一風有二つか三つの子を抱き酒やののれん押明ておじやまながら酒を少々下さりませと内へは入れれば何じや酒くれへ、ンこちの内には酒はないは通

お赦しなされて下さりませ、そしてよい酒とおつしやるは名酒でもあげませふか、アイ遣ひ物に致しますのじや程に随分よいのを内方の塗梅に一升入て下さりませヲ、お遣ひ物になさるなら相生がよからふと、ほこりを拂ふ塗梅に上具さし込み小きんの呑よい程らしい詰梅の口にべつたり銘酒の書付手早に張て差出せばヲ、相生とは芽出度銘酒價はそこへ宜しふと、おあし取出し差出し、近頃わりなき事ながら内方のお衆に此梅持せて、一寸そこ迄やとわかしして下さりませぬか、ヲ、それは何よりお安い事コリヤ、長太よ此女中様に付て居て梅の明た時取りに行く様に先様をよふ覺えて戻らふぞや、どこ迄なりと連てお出でなされませヲ、

それはマア、お膳しや、お禮は戻りに申せふ、こなさんいかに太儀ぢやの、と挨拶とり、ぬり梅を長太に持せ出て行く引連て主半兵衛老の五調氣はいくら急ぐ足元我家の軒跡に年寄五人組打連伴ひ立歸れば、親父殿戻らしやつたか、ヲ、コレハ、お年寄様どなたも、いかに御苦勞思ひがけない代官所のお召故何事が起つたかと今朝からわしは案じつゞけ氣違な事じやござらぬかア、イヤ、お内儀さして氣違な事じやござらぬ高がこゝの半七が山の口で人殺した、ア、イヤ、申お宿老様半七が人殺し、ム、サア、惚めが一頃は違ふて、モ、ぞけ出した故の勘當ムサ、其挨拶は忝いけれど先其分になされて、ナア、何も

仰有て下さりますな、ヤコレ、女房共定めて案じて居やつたのであるが何も氣違な事じやなかつたが皆様は無御退屈御酒でも爛して上ましやと夫が詞に悦ぶ女房それはマア、目出度い事身に覺はなけれ共、時の災難でどんな事が起ふかと案じた程は悦ばぬ皆様の草臥休め者はなくと御酒一つと立を留めてア、コレお内儀イヤモよしにさつしやれ。下宿で支度して酒もたんと呑んで居れどトットモ理に入つたかして酔も出ぬア、氣の毒な事では有と宿老の投首、何とやら様子有げの折柄に上の町からおい、と泣て戻る阿呆の長太片手に酒樽片手に抱く稚子も俱に泣く我家の内エ、又阿呆めが餘所の子にせぶらかされたナ、エ、よい年をして何

のほへざまたしなみおれと叱られてイ、エこちやせぶらかされやせぬけれどなきつきの女がおれを辨天様の中へつれて往てちよつと其所まで往てくる程に此子をおつとの間抱て居てくれと言ふてナそしてから、何處へいたやら、何ぼ待ても戻らぬによつてナ金比羅様や八幡様や生玉の中をあつちへいたり、こつちへいたり尋ねる中に此子が泣によつて、それでおれも悲しいワア、、ヤイ、何をぬかすやら、それはおのれが阿呆じやによつてやつぱり辨天の中に待て居ればよい事をエ、定めしこゝへ尋ねて見へるのであると、泣子をすかし抱取りヲ、よい子じや姫御前の子じやそふなと長太が提し梅打ながめハア替つた書付コレ見やしやれ、

親父殿と樽さし寄ればハテ此廣い大坂同じ名もあらいでとは言ひつゝ立寄眉にきは、ム、進上、上臈町馬場先にて茜屋半兵衛馬場先で茜屋半兵衛といふはこちの事じや、見りやこちの塗樽コリヤ様子でも有事かサイノ様子と言はさつさに見知らぬ女中が酒買ひに来てアノ長太を雇ふて連れていかれたが其樽に此書付ヤア何じや見知らぬ女中が酒買ひに来てサイノ、其時何の譯も言ずアノ阿呆を雇ふて、ム、ハテ、めんよふな、とふしぎに立寄五人組こゝらがお宿老の分別所と、言ふても詰る塗樽の禿たあたまをかたむけり、半兵衛膝を丁と打ち、ム、よめた、コリヤ捨子じやはい、ヤア捨子とは何を證據ハテこちの内を買ふた酒に進上、茜屋

半兵衛様と書付其子を阿呆に抱して何處やら行方の知ぬは疑もない捨子此半兵衛を見込養育頼む印の此酒何とそふじや有るまいか、ム、成程言はつしやればそんな物、何のよしきもない人が酒くれふ筈がない是が捨子なら何とまあ利口な仕様じやござりませぬ、かソレイノみかん籠もいらす、イヤモ新らしい捨子の趣向、ヤコイツワ一番はやりませふはいの、シタがコリヤ捨子のつゝもたせじやないかや、ハテ何と致しませふ、こふ突附られた事じやもの養ふてやらざなりますまい、おゝそれはいかに後生じやが其かわり其子について遺論妨ある時は何時でも町が證人じや、サ、何と皆の衆、是をはねにモウいのふじや有るまいか、イ

カニモ左様と立上れば半兵衛夫婦つどく今日御苦勞御世話の禮、何やら物を言たげにふり向宿老を目でとゞめ稚子いだしおぢうばは一間へ。

(床本) 酒屋の段 (切)

こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたり盛を獨寝の、お園を連れて爺親が、世間構はぬ十徳に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯をともし、表を締と急々と、出合頭に。詞ホ、是は宗岸様、其處に居やるにお園じやないか。アノ母様、お替りもござりませぬかと、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼る。宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿

お宿にかと、娘を連れて打通れば。妻は門の戸引立て、サア〜先づお上り成されませと、奥底も無き詞の中夫と聞くより半兵衛が、一間を出る流々顔。詞娘を連れて行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいませ、此間の嫁女の歸つて居られませ、いかにお世話でござりませふナンノ〜、半兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と、無理に引立行つたのは、娘に引を取らすまい爲儂が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれふが如何爲ふ

が、男の方から迫出すまで、取戻すと云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひ、と悔んでも跡の祭り園めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まねば、若や病が起らふかと、見て居る親の心は闇、儂も天満に年古ふ住んでゐれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは詫ねば成らぬと、年寄の顔押拭ふて來ました。何彼のことは了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下され、これ頼みます御夫婦と謝り入つたる挨拶に、お園もうちうぢ、手を支へ。爺様の一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七様に嫌はれるは皆私の不調法、鈍に生れた此身の科、詞今から随分お氣に入る様に致しませう程に

猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さりませ。お二人様と、跡は詞も涙なり詞オ、何のママ、其方さへ其心なら此方は變らぬ嫁姑。ノウ親父殿、そぢや無いか。イヤそうぢやない。昔唐に例が有る。太公望とやらいふ人の妻、夫に隣取り月日を纏て、託言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦に成らんと、太公望が云はれたと、且外講釋で聞いて來た、夫と丁度同じ事、此方の方から無理隙取つて、今更嫁と思へとは、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かずと、早う連て退しやれ〜と、膠もしや〜りも納戸口、顔も背けてゐたりける。詞オ其腹立は尤も〜、が重々不調

法は、此天窓に免了簡して、何卒嫁に。否でござる、悴めも勘當したれば、嫁と云ふべき者もない筈。サア夫も懲しめの爲當座の勘當。イヤ當座でない、七生までの勘當ぢや。ム、其又七生まで勘當した半七が代りに、此方は何で繩に掛つた。ヤアサア半七とは親でも子でも無い此方が、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたと、思ひも寄りぬ岸が、詞に悔り驚く、女房、嫁も俱々立寄つて、肌掛脱せば半兵衛が、小手を緩めし羽搦締。ノウ情無や何事と、嫁はうる／＼、女房も取付き歎けば宗岸が。詞イヤ未だ驚くことがある、聲の半七は人殺し、お尋ね者になつたわいのと、聞くより二人は又悔り。夫は何故如何した諱、操

子を聞かしてコレ／＼半兵衛殿と聞へども更に返答は差俯いて詞なし。宗岸涙の目をしげたまき、詞一昨日の晩山の口で、善右衛門を殺したは茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいか悔りせまいか、膝も腰も抜果しが、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儕も娘を取戻したら、親にかゝる首籠も無い、能い事爲たと世間から譽める人も有らうが、親と成り

舅と成るが、大抵深い縁かいのう。斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れてきた心はのゝ一旦嫁に遣したれば、半七が厭がるならハテ尼にしてなと此内でも、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下され、コレ手を合して頼みます、託言が叶はねば、引放されたと突き詰て、短慮な心も出し居ろかと、案じ過して夜の目も合ず、母親は無し唯一人、彼女を思ふ儕が因果、此方の綱目も半七が、科人に成つたら猶可愛かる、譬へ又勘當が定ても又離切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親。儕も此方は無けれども娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はふ

が儂や可愛い不便でござる。これこれ開入れて給へ半兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き。我強う生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣りオ、道理じや〜宗岸殿。と、跡はないぢやくり、妻もお園も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり。半兵衛涙の内よりもお園が顔を打守り、何から何まで氣を付けて孝行にして給る。斯な嫁が尋ねたとて、最一人と有る物じや無い、世間の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、其方に別る、半兵衛は、能々不仕合せ、退せとむ無い、返しとむ無い、とは思へども、此方に置けば此儘若後家、儂は夫が可愛い。いとしようおちやる。夫で詫言聞入ぬ、了簡して

呼戻さぬ。これ嫁女、必ず酷いと恨んでばし給んなや。一人の悴はお尋ね者、翌日より誰を力にせうぞ。孝行にして給はつたが、今では結句根めしいと、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正體なく、伏沈むこそ道理なり。半兵衛漸々顔を上げ、云はねばなぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛け給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にと三人は惜々奥へ泣に行く心の中ぞ哀れなる。跡には園が憂思ひ、かゝれとてしも鳥羽玉の、世の味氣無き身一つに、結ばれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言、詞今頃は半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返ら

ぬ事ながら、私と言ふ者無いならば半兵衛さんもお通に免じ、子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、半七様の身持ちも直り、御勘當も有るまいに、思へば〜此園が、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まいもの、お氣に入らぬと知りながら未練な私が輪廻故、添臥は適はずとも、お側に居度いと辛抱して是まで居たのがお身の仇。今の思ひに比べれば、一年前に此園が、死る心が付かなんだ。堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてゐると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂思ひ。詞翌日はとうから父様之又連れて天満へ往に、半七様の不圖した果敢ない便りを聞くならば、

思ひ死に死ぬで有る、逆も浮世は立ぬ覺悟嫌はれても夫の内、此家で死ねば後の世の若しや契りの綱にもと果期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいぢらしむ。斯る哀れも知らぬ子の合な、聲に目や覺ましけん、一間を出て、乳飲まう、乳が飲み度いおぼくくくと、お園が膝に寄添ふ子の顔見て恠り抱き寄せ、詞ヤア其方は美濃屋のお通じや無いか、爰へは如何して在つたと、不審ながらも抱上ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、詞オ、これく嫁女忝ない其心、障子の内で聞く度に、拜んでばかりゐたはいの。禮云う事も澤山あれど心の急ぐは此子の事、美濃屋のお通と云はしやつたは、半七と三勝の。アイお二人の中に出來た

お通と云ふは此子じやわいな。ヤアく親父殿聞かしやつたかオ、聞いて居る、其又お通を、ナ、何で捨子にしてト此地へ越した是や理由が有らう、嬢嬢か何所ぞに、書いた物でな無いか、早う尋ねて見やと言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりと落たる一通取る間遅しと封押し切、詞ヤア何ぢや、書置の事と書いて有る。ヤアくこれく嫁女其方の好い目でちやつと讀やく。アイく、ナニナニ十度契りて親子と成る、父の恩は山よりも高きとの世の教、我身にも辨へ居候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に擲まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下され度候、別て母様の御養育。申しお前の事でござりま

す、能ふお聞き成されませいオ、能ふ聞いてゐますわいの。唄M聞いてゐるさの障子より、洩れ出る月は冴れど胸の闇、合詞エ、時も時と隣の稽古、然して其跡は、何と書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御恵み、親父様御機嫌悪い時には、蔭になり陽になり、幾千萬のお心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。詞ア、夫なら矢張半七様はオイノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ、ハア彼善右衛門と云ふ奴が、大抵や大概、悪い奴ぢや無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗我子の命を解死人に取る、と思へば思へ宗岸殿、口惜いわいのく、無念にござると述懐涙見聞くお園は

以前の剃刀、南無阿彌陀佛と覺悟の
 体、是はと驚く、母、宗岸叶はぬ手
 にも半兵衛は、漸々押へて、これ嫁
 女、詞寄ばかりを跡に置き、死な
 うとは胴慾ぢやはい。エ、これ
 が死なずにゐられませうか、放して
 殺して下さい。オ、娘、尤もぢや
 〳〵わい、ア老少不定の世の中
 と、聞流したも今身の上、みづ〳〵
 とした若い者、義理に迫つて死ぬる
 とは。ノウ半兵衛殿宗岸殿。思ひ廻
 せば廻す程チエ、口惜いわいの〳〵
 唄 **M** 鴛鴦の片羽のとぼ〳〵と、子
 に迷ひ行く小夜千鳥、無残や半七は
 今宵限りの命ぞと、三勝件ひしほし
 ほと心に掛る我子の顔、名残にせめ
 て今一目と、俱に戸口に夜の鶴、内
 には夫と白髪之母、心ならねど書置

を又取上て讀む文章。詞人を殺し一
 日も、生長らへる所存はなく候へど
 も、お通と申す娘一人ごご候て、殊
 にかよはき性質、不便さ餘る親心、
 夫に心が引かされて、今日まで長へ
 候へども所詮助からぬ身に候へば思
 召も省みずお通を遣はし候まゝ、私
 の小さく成しと思召され詞どれ〳〵
 婆見しやいの〳〵エ、私の小さく成
 しと思召され御養育のお世話の程く
 れん〳〵頼み上候。子を持つて知る親
 の恩と、お通が不便さいぢらしさに
 お二人様の御恩の程、猶更此身に浸
 るに應へ有難存奉候、又々心掛に
 親父殿の御勘當相果候後にも、お
 放し下され候様、母様宜敷お執成、
 是のみ黄泉の障に御座候々々々、オ
 、道理ぢや道理ぢや〳〵可愛や

と泣聲洩るゝ表には、半七が身に應
 へ斯る嘆きも我故と、思はじ今更空
 恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や杖
 を啗締々々、泣く音止むる憂き思ひ
 此方はお園が猶涙、泣々取上ぐる書
 置の、讀むも果敢なき世の中に、詞
 女は其家になつて定まる夫一人を、
 頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ
 我等がみもち、いつしか愛想らしき
 辭も掛す、終に一度の添臥も無候へ
 ども、其色目も致さずして、親達大
 事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段
 山々嬉しく存じまゐらせ候。今まで
 すげなふ致せし事も、更々嫌ふでは
 無候へども、三勝とはそもじの見え
 ぬ先からの馴染にて、子まで設けし
 中に候へば互に退去も成り難く、夫
 故疎遠に打過まゐらせ候。併し夫婦

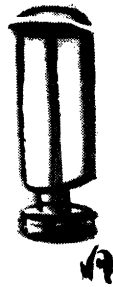
は二世と申す事もそふらへば、未來は必ず夫婦にて候ふ、詞オ、是やまあ誠に半七様、こりや、い娘、未來で夫婦と書いて有るかいや、ア、ア、未來は未來ぢやが、一日なりと此世で女夫にして遣り度い、何としてマア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ。どれ、娘最少とじやどれおれが讀みませう。兎角不孝の我等に候へども、死後には嗚やお二人や、宗岸様の御歎き、随分々々力を付け此身に代りて御孝行に成し下されべく候。申し残り度き事どもは數々候へども、涙に字性も見え難く、あらあら惜しき筆止申候只々お通が事のみ頼上候。此上は亡人後のお念佛、南無阿彌陀佛々々々々と、讀も終らず宗岸親子、又俯沈め

ば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ初孫の顔が見度いと心に思へど世間の義理で是まで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事と知つたらば、顔見ぬ内が増しであつた。愛らし盛りの此お通、半七と一緒に暮すなら能い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあば、ばつかりオイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆と一緒に寝いよ、とはいふ者の乳も無く、今から先の寢起にも、嗚や歎かん親々が、知らずにゐるが朋慾者、慘い心いぢらしやと、言ふ聲洩るゝ三勝が、思はず乳房を握り締め、詞乳は爰に有る物を飲まして遣たい、顔見度い乳が張るわいのうとを身、慄はせ、駈入らんにも關の戸に空音も成らず羽拔鳥、親は

外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しさ迫る内と外、一度にわつと湧き出る、涙浪花江、泉川小きを汲出す如くなり半七は齒を嚙締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿体なや、不孝を赦させ給はれと、悔み歎けば三勝も皆成故の御事と、俱に詫入る中に半七、詞何時まで泣いても返らぬ繰言親父様の御繩目、早う解くは身の最期、イザ、急がんなアおぢやと立上りしが、今生の別れにせめてお顔をと差し覗けば三勝も、お通を一目と延上り、見れども親子隔ての關何と千萬無量の想ひ、兩手を合せ伏拜み、合おさらば合、と云ふ聲も歎きに埋む我家の中見返り、死に行く、身のなる果ぞ哀れなり。半兵衛はつと心付き。詞

此書置の文体では、今宵最期と決めし半七、宗岸殿も手分して行衛を尋ねん、サア早ふくく身づくろひ、立出んとする所に、思ひ掛なき表より、詞ヤア、善右衛門を殺せし咎人茜屋半七召捕つたりと呼はつて庄九郎に繩を掛、立出る宮城十内、詞半七が殺せし今市の善右衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊召捕に來りし處、一昨夜半七に殺されし由、則ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親子に科無しと、立寄つて半兵衛が繩目解けば四人が悦び、夢では無いかと伏拜み、詞これ親父殿、十内様のお情で半七が命助かると、のう、何ぞ命の有る中に、止めて下され半兵衛殿と、急るを聞いて十内

が詞半七は死に出たとや、エ、遅かりし残念々々、役目なれば心に任せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、十内が花も實もある櫻井の、掬和國の名も、大和五條の茜染今色上し艶姿其三勝が言の葉を、爰に移して止めけれ。



春の大歌舞伎

四月一日初日

毎日午後二時開幕

傳統の花咲き薫る三百年
竹田出雲の大傑作を今ぞ
國民總力戦に備へて

上方の産んだ狂言

通し狂言

假名手本

忠臣藏

十五場

大喜利

上の巻 保名
清元梅吉中

下の巻 花見踊
長限彌子連中

御観劇料

五等席	八十五錢
四等席	八十錢
三等席	一圓三十錢
二等席	一圓八十錢
一等椅子席	三圓五十錢
特等席	四圓

(他に各等入場税一圓)

どうとんぼり

中座



盲杖櫻雪社

盲杖櫻雪社

福の市 竹本源太夫
 徳の市 竹本文太夫
 玉の市 竹本伊勢太夫

豊竹千駒太夫
 竹本播路太夫
 豊竹さの太夫
 竹本駒若太夫
 豊竹富太夫
 竹本長尾太夫
 豊澤仙糸
 野澤吉彌
 鶴澤友造
 鶴澤寛市郎
 鶴澤叶太郎

盲杖櫻雪社は官位を頂き京洛へ上る三人座頭が面白き節につれて振りをかしく踊り狂ふいづれも壽ぐ目出度ものです。

(床本) 盲杖櫻雪社

何事も辛未の明の春、盲杖櫻にたとて丸様のみやしるに、雪白妙の朝霧も、晴れるや注連の飾り蝦、位取りとて都をさして急ぐ道さへ冬の空危い所をヲ、サ合點ちや野梅山、梅香を聞く計り名所古蹟も知ぬが佛探りく急ぎ来る、詞何と徳の市福の市コウ三人連立て官を貰ふて逝から仲よふしやうちや有るまいか

ヲ、コリヤ玉の市の云通り長の道中連立も他生の縁でも有ふかい、しかし福の市は足弱で世話がやけるで困つた事、ア、コレ徳の市其様に足べたをそしめる者じやないわい、其替りおれに一つの隠し藝在所踊りをうさはらしにちよつと踊つて、ア、ウハ、聞かしてやろうかい、コリヤ面白く我等も俱に一踊り、サア、早ふに福の市は扇をしやんと座を構え、沖の白帆の雲隠れ春は曙の朝景色、ちよつと此目が明石湯我にも見せよや丸の社は和歌の守神、おいらもちよつとはなる口の杓とふの見すがらにくみかはしたる大瓶の、酒が言はする口拍子、按摩疝癪針とふく朝は迅ふからおちこちの流渡りの大井川、運臺ならぬ肩車、我手

(野澤吉三郎)
 (鶴澤清仙友)
 豊澤仙友

人形

福の市 吉田榮三
 徳の市 吉田文五郎
 玉の市 吉田玉次郎

で諷ふ小寶ぶし一に權現ナア、へ
 二に玉津島、三に下り松ナア、へ、
 四に鹽釜よ、天の橋立切戸の文殊文
 殊様はよけれ共、切戸の文字が氣に
 かゝるゝ来るかゝと濱へ出て見
 ればノウホイ濱の松風頃やまさるサ
 やとかげのホイ、眞赤となすいた水
 仙すかれた柳のホイノ心せきちく氣
 は紅葉、サアトカケマツカトナ池の
 〳エ、鱧めが朝日に輝く夕日にな
 びく眞孤の小影にちよつと出ちよつ
 とはね二度サ出てはねた、ヤレはね
 たがどうすりや鱧と娘ははねたが賞
 玩ハレワイヤコレワイサノ田舎踊の
 面白さ早入月に花に風ねぐらを急三
 人連杖を力にたどり行く。

劇同合大舊新

四月一日初日

毎日ヒル正午(二回)
 ヨル五時半(開演)

第一 男子非常時 四景

第二 所作事

第三 久松 東錦繪 一幕

第四 國定 忠治 三幕

第五 神西住 戰車長 六幕

第六 行友李風作 早瀬 豆演出

第七 御観劇料

第一等席 二圓

第二等席 九十錢

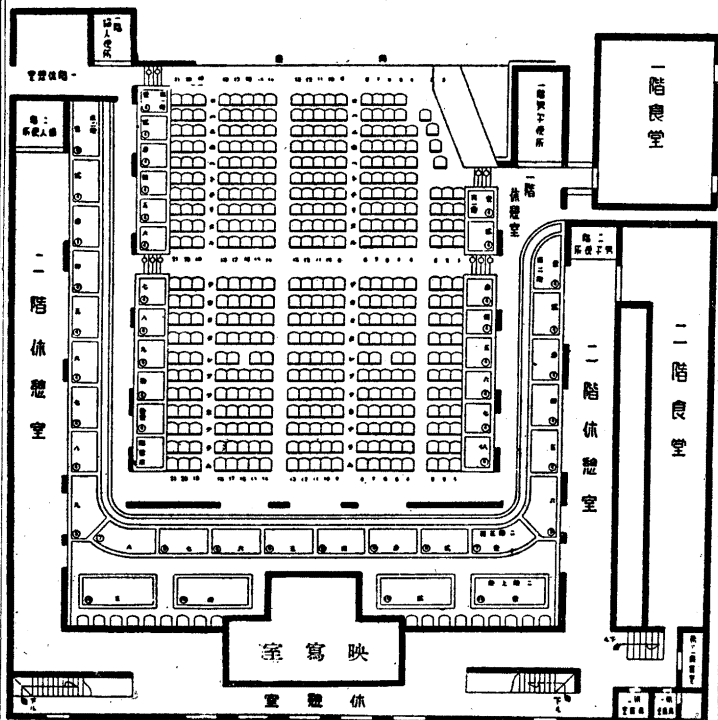
第三等席 五十錢

椅子席 五十錢

(他に入場税一圓)

どうとんぼり 角座

内案御席場御座樂文



御、觀、席、は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御座席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は南四七一一番で御座ります

切、符、賣、場、右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります
二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

觀賞おほえ

昭和十四年四月 日

花競 四季 壽

小春 天網島時雨炬燵

妹香山婦女庭訓

三七勝 艷容女舞衣

盲杖櫻雪社

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものとありま。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御攜帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下にお大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

休憩憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます。高ムシタオルの御用意をして居りますから御自由に御使用下さい。

お出入口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御中附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めしますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として 人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上ける事に致しました。御一報次第參伺、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南①三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 木村龍之介

よろづ案内係 古賀文吉

昭和十四年三月卅一日印刷
昭和十四年四月一日發行
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪府南區久左衛門町八番地
大阪府西區土佐堀通一丁目十二
松竹株式會社大阪支店內
印刷所 永井日英堂印刷所 金二十錢

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前に御下命賜
はれば至極御便利で御座います

大阪四ツ槁

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも

電話南 (75)

—	—	—	—	七
三	三	三	三	〇
三	三	三	三	—
四	三	二	—	—
番	番	番	番	番

